

### Ⅲ．中学部の研究

#### 1．教育課程再編に向けて

##### （1）再編の背景

##### ①生徒の実態

中学部は生徒数17名（男子11名、女子6名）である。日常生活面では、教師の手助けが必要な生徒も何人かいるが、多くは自分で身辺処理ができる。コミュニケーションの状況を見ると、言葉によるやりとりが可能な生徒が多いが、ほとんどの生徒に言語障害があり、教師との間でも会話がスムーズにいかないことがよくある。また、サインや発声を使って要求を伝える生徒も少数いる。集団生活の面では、「明るく楽しい中学部」という雰囲気はあるものの、授業中に集団から離れる生徒、指示は理解できているのだが着席行動が難しい生徒、友だちとのかかわり合いが薄い生徒などがある。

ここ10年間の特徴的なこととして、言語障害の割合が高いこと（70%を超えた年度が7回）、自閉傾向をもつ生徒が平均で4割在籍していること、ダウン症の生徒も毎年約25%以上を占めていることがあげられる。また、IQの分布は、幅広く散らばっている状況が見られる。全般に言えることは、会話のできる生徒であっても気持ちを相互に伝えあう力が弱く、要求は伝えてもそれ以上のかかわり合いをもとうとしない生徒が目立つ。

その他、特徴的な様子として、

- ・些細なことで情緒不安定になりやすい
- ・コミュニケーション能力が脆弱で友だちとのトラブルを起こす
- ・できることでも指示がないと行動を始めない
- ・体のバランスがやや悪く、動作がぎこちない

などの生徒の存在が目立つ。

また、新入生の半数が他校からの入学者であることも、ふれておかなければならない。彼らの中には新しい学校生活に慣れるまで時間がかかることが原因で、問題を起こしてしまう生徒もみられる。一方では、中学部に入り新しい集団がつくられ、それを機会に人とのつきあい方を学ぶ一つのチャンスともなっている。

多彩な行動特徴を示す生徒が増え、重度化傾向にある中学部であるが、単にそれだけではない。いわゆる思春期と言われるこの時期は、精神的に不安定で過敏な状態にあり、心の中でいろいろな気持ちがぶつかり合い葛藤を起こしたり、動揺したりする。また、脳波異常やてんかん発作が発症する生徒が出るなど混乱の時期でもある。重度化、多様化傾向とともに、心身の変化の最も著しい時期における教育課程はどうあるべきか、私たちの必須の課題となっている。

##### ②新学習指導要領の告示

平成10年12月に文部省は新しい学習指導要領を告示した。各学校がゆとりの中で特色ある教育を展開し、児童生徒が豊かな人間性や基礎・基本を身につけ、個性を生かし、自ら学び自ら考える「生きる力」を培うことを基本的なねらいとして、改訂がされた。

本校においても近年、豊かな心をもち豊かな生活をおくることができる児童生徒の育成をめざして、取り組みがされてきた。中学部でも「生きる力」につながる自己決定の力、自己表現の力などを育てていく指導のあり方について、ここ10年間あまり研究してきた。新学習指導要領が示すねらいと合致している部分もあるが、教育課程再編に取り組む中で、さらに教育目標、教育内容の検討をしながら、特色ある中学部の教育をつくっていきたいと考えている。

### ③ここ10年間の中学部の教育 ―『心を育てる』ことをめざす教育―

現行の教育課程の改訂は昭和63年（1988）にされた。その後10年あまり経過したがその間も、新たに、指導内容や指導方法について、授業の実践を通して研究を続けてきた。そこでいつも問いかけていたのは、「子どもたちの姿をどうとらえ、何を大切にしていけるか」であった。教育課程再編の際にも「何をめざして、どんな指導内容で、どのように教えるか」が問われるが、「何を大切にしていける（何をめざして）いくか」という問いに対して、私たちは『心を育てる』ことを考えてきた。

思春期といわれるこの時期は『子どもから大人への生まれ変わりの時期』と言われている。それまでは大人がすぐそばにいていろいろと手助けをしてくれ、子どもは安心して成長することができた。しかし、この時期を迎えると、大人に援助された生活から、自分の力で何かをする生活を求めるようになる。今までの古いシステムを壊して、新しいシステムを作り直す『システムチェンジ』の時期と言われる。

生活の仕方一つをとっても、この時期以前は大人が教えたやり方が一番よいと思ってそれに従っている。思春期に入ると、自分でいろいろとやってみたり、友だちのやり方を参考にしたりして、経験を重ねていくうちに、自分にあった方法を見つけていく。

このように『システムチェンジ』していくためには、次のような要素が必要となってくる。

- ・自分でやってみよう、試してみようという気持ちがあること
- ・友だちがいて、交流があること
- ・自分にあった方法を工夫したり、選んだり、決めたりする力があること

思春期の生徒を前にした教師の役割とは『システムチェンジ』の時期にある子どもたちに適切な支援をしていくことである。子どもたちがもっている力を発揮して成長していくのを支援していくことである。上記の要素、「やってみる・試してみる・工夫する・選ぶ・決める」といったことは、人間の意思・意欲のことであり、心の働きに関係する。その心の働きを育てるのが、教師の役割となる。障害をもった中学部の生徒たちには、それに応じた方法での支援を考えなくてはならないが、『心を育てる』ことをめざしていくことは、通常の教育とは基本的には変わらない。生徒たちが自分自身で『工夫し・試し・行い・選ぶ・決め』ながら『システムチェンジ』していくことは、まさに新学習指導要領が示す、個性が生かされ、自ら学び自ら考える「生きる力」を培うことにつながっていくと考えている。

中学部では、この10年間に、これまでに行なってきた学習活動を再検討してカリキュラム化し、また、新しい学習活動を誕生させてきた。『ハッピータイム』『散歩』『フリーデイ』の3つがそれにあたる。いずれも『心を育てる』ことをめざし、指導内容や指導方法を実践研究しながら、現在も取り組んでいる。

この3つの実践について「どんな力を育てていくか」または、取り組む中で「どんな力が育ってきたか」を示しながら、以下の項で紹介していく。

## (2) 3つの実践について

### ①ハッピータイム

『ハッピータイム』とは、中学部の学部集会のことである。本校では生徒の成長発達には、多様な集団での活動が必要であるとの考えから、学級を基礎集団とし、その他に学部集団、全校集団での取り組みを進めてきた。しかし、集団参加ができていく生徒が増えていくことが問題としてあがってきた。一方、これからの青年期、成人期を豊かに生きていくためには、周りの人とかかわる力をつけることが必須である。相手の気持ちを読みとり、自分の気持ちを伝えていくコミュニケーション能力を高めることが重要な課題となる。そこで、自分と自分のいる集団に対する意識をもたせ「みんなであることが楽しい」と思える活動を中心とした集団活動に取り組むことにした。この時間を過ごすことで気持ちが嬉しくなる、みんなと一緒にいることが楽しく思える授業と言うことで「ハッピータイム」という名前がついた。

現在は、週4回行われ、表Ⅲ－1にある通りに実施されている。この4回のほかに、行事の事前・事後の指導もハッピータイム（以後H・Tと表記する）として行っている。

表Ⅲ－1 H・Tの内容表

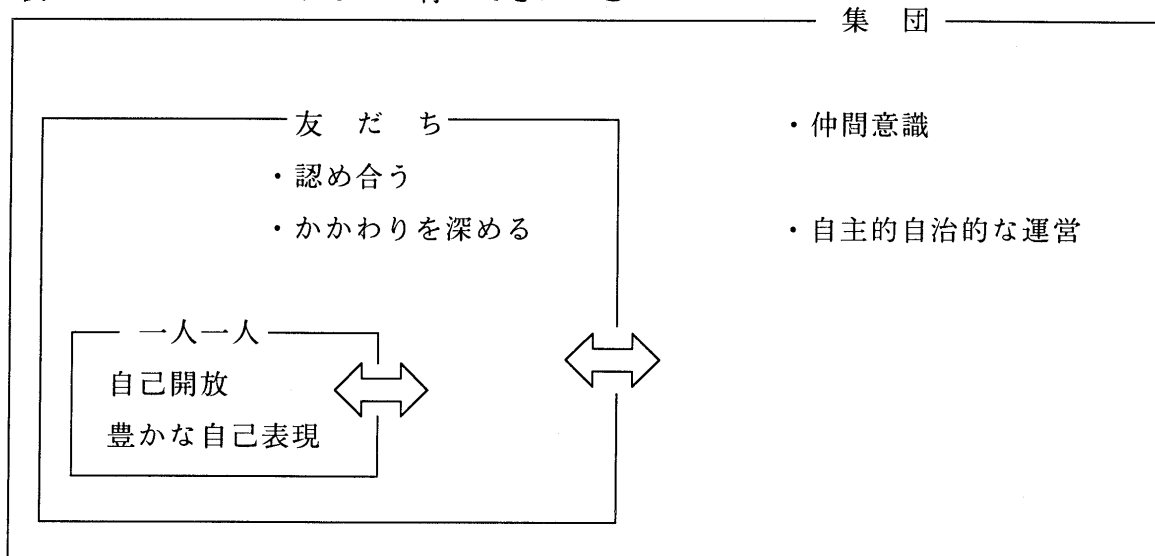
	曜日・時限	週時表の表記	内 容
体育的活動	月・5	ゲーム (チャレンジ)	体を自由に楽しく動かす簡単なゲームをする 一つの目標に向かい体を動かし全員が協力して行う
文化的活動	火・5	音 楽	歌ったり、楽器を演奏したり、身体表現をしたりして楽しむ
	木・5	発 表	自分のこと（住所や家族など）を皆の前で発表する 身近な人を招いて、話を聞いたり、得意なことを見せてもらったりして、一緒に楽しい時間を過ごす
週番活動	金・1	週 番	来週の予定を確認し、週番目標を決める

H・Tに取り組むようになって、自分中心であった生徒が、しばらく待って友だちのしていることを見たり、発表を聞いたり、周りの様子を見るようになった。友だちのことに関心をもちはじめ、友だちを理解しどう接すればよいのかがわかるようになってきた。また、みんなの中に自分を出し、そのことによって自分を知っていくようになった。さら

に、H・Tの時間だけでなく他の学校生活の場面でも、人とのかかわりを楽しいと感じ、他者へかかわろうとする生徒が多く見られるようになった。（表Ⅲ－2）

H・Tの取り組みは、周囲の状況や他者との関係の中で自分を表現できたり、行動を選択できるなど、他者と自分との関係を保ちながら生活を送ること、つまり、社会生活に必要な基本となることから獲得していくことにつながると確認できた。

表Ⅲ－2 H・Tのねらい・育ってきたこと



## ②散歩

中学部で『散歩』に取り組み始めたのは10年以上も前のことであるが、『散歩』のもつ、子どもたちを育てる力を模索し、『散歩』を教育活動に組み入れカリキュラム化してきたのは、平成6年度に始まった『散歩』の実践研究からである。（表Ⅲ－3，表Ⅲ－4）『散歩』は、主に学級単位で活動する『生活』の時間に取り組まれ、今では中学部の教育活動の中で重要な意味をもつまでになってきている。

取り組まれるようになった背景には、言葉のやりとりや着席行動がとれない生徒、友だちとうまくかかわれずトラブルを起こす生徒がいた。課題は生徒も教師もお互いに一人一人をどのように理解し、周りとかかわっていくかにあった。教室の中で「～しなさい」という教師と生徒の関係では解決はできない。「教師と生徒が同じ場に立ち同じ行動を通して向き合うことが必要である」という認識のもと『散歩』の取り組みが始まった。

そんな生徒も『散歩』に出ると教室とは違った姿を見せる。人や物、自然と出会い、友だちや教師とかかわり合い、時には思いがけないことにも出くわす。人や自然とふれあうことで生まれる感動、仲間と共に対象に向かうことで生まれる感動もあった。教師も、子どもたちとどうかかわればよいのか、多くのことを学んだ。予定された内容に生徒を合わせるのではなく、生徒に合わせて内容を決めていくとき、生徒は主体的・能動的に活動を開始するという、生徒一人一人の動きや気持ちを十分読み取り、理解しながらかかわっていくことの大切さを実感した。その手だてとして子どもをじっくり見つめること、待つこと、適切な援助をすることなど、教師の姿勢として共通確認された。これらの教師の姿勢は『散歩』に限らず学校生活全般に向けられ、子どもと子どもをいかにつないでいく

か、つなぐには何が大事かを実践を通して明らかにしてきた平成8年度の研究に発展していった。

『散歩』に出かけるのは、基本的には学級単位の『生活』の時間である。この『生活』の週あたりの時間を増やし、併せて1時限40分の細切れの時間割ではなく、長い時間とれるようにしてきた。現在は、4時限枠を火曜と土曜の週2回設定してある。それは大きな集団の中で周りとうまくかかわる力を育てるために、小さな集団即ち学級において教師や友だちとゆったりと丁寧にかかわる体験をもたせ、より豊かな人間関係に発展させたいという願いからである。子ども同士のかかわりは『散歩』で深まり、その力も伸びてきている。

『散歩』の取り組みは、週時表を大きく変えてきた。また、生徒に合わせて内容を決めるという姿勢は、より適切な教育課程をつくることを可能にしていくと考えている。

表Ⅲ－3「散歩」のねらい（目標）

平成七年度研究紀要より

三年目	〔集団〕仲間とともに考える 〔個人〕集団の一員として行動する
	〔集団〕仲間とともに楽しむ 〔個人〕自分と他（人・物・場所）とのかかわりを認識する
	〔集団〕クラスの仲間を意識する 〔個人〕自己決定をする

1年生

2年生

3年生

表Ⅲ－4「散歩」の活動内容表

平成七年度研究紀要より

◆散歩の形態（方法）

ぶらり散歩

- 教師主導型と生徒主体型
- 集団で行く散歩と個人で行く散歩

目的散歩

- 教師主導型と生徒主体型
- 集団で行く散歩と個人で行く散歩

◆散歩の場（対象と題材）

自然との

かかわりを求めて

- 川に出かける
- 石ころ道を歩く
- 草むら进行く
- 花を見つける
- 秋の山を歩く
- 竹林を歩く
- 雨の中を歩く

街との

かかわりを求めて

- 学校周辺を歩く
- デパートに出かける
- 公共施設に出かける
- 市内バスを利用する
- 階段道を歩く
- 橋をたどる
- 坂めぐりをする

社会との

かかわりを求めて

- お店を見つける
- お店で食べる
- マンホールをさがす
- 用水をさぐる
- バス停をたどる
- 出会った人と交流する
- 交通ルールを知る

◆散歩へのアプローチ（ねらいと言葉かけ）

散歩になれる

散歩を楽しむ

散歩を知る

●「お出かけするよ」	●「いいお天気だね」	●「何が好き」
●「〇〇行くよ」	●「〇〇見てこようか」	●「何したいかな」
●「〇〇を歩いてこよう」	●「今日の先頭〇〇さん」	●「どこ行こうか」

◆指導の手だて（教師の姿勢）

気 づ く

見 守 る

支援（援助）する

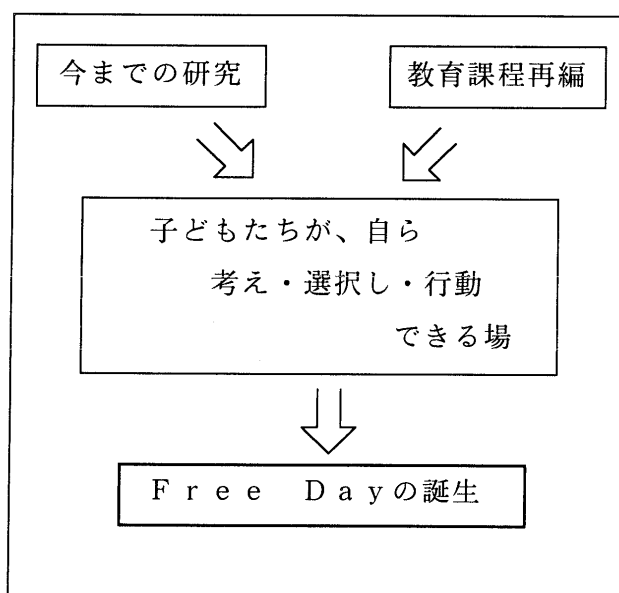
●見る	●待つ	●ヒントを示す
●知る	●認める	●きっかけを与える
●感じる	●受け入れる	●気づかせる

### ③フリーデイ

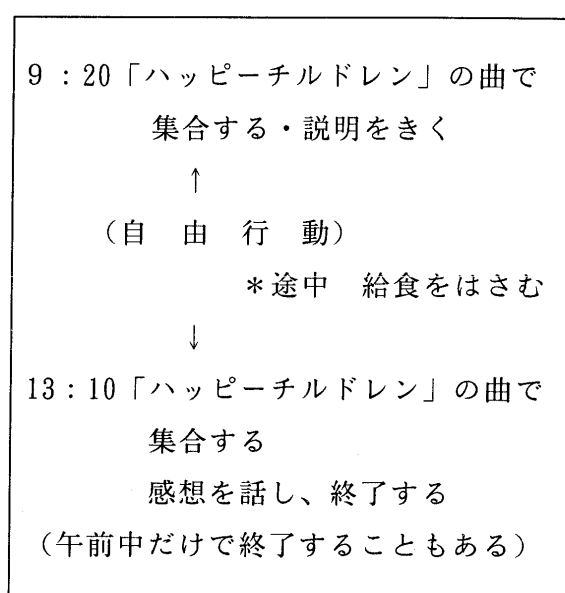
昨年度、『豊かな心と生活』というテーマに「教育課程再編に向けた実践研究」という副題がつき、教育課程再編に向かって第一歩が踏み出された。中学部では『フリーデイ』の取り組みを行った。（表Ⅲ－７，表Ⅲ－８，表Ⅲ－９）

休み時間は、原則的に、子どもたちの自己選択が完全に保証されている時間帯である。しかし、何を選択してよいのか、遊びたいが遊べないという子どもたちをよく目にする。この休み時間を思い切って午前中全部を自由に活動できる「ずっと 長い 休み時間」にした。これが『フリーデイ』である。長い時間を保証することで、自分のしたいことを見つけそれを行う、一つの『生きる力』を育てることをねらいにした。指導方法は、原則として「～しなさい」「～しよう」とは言わずに、子どもから要求があったときに応じて、共に楽しむ姿勢をとった。

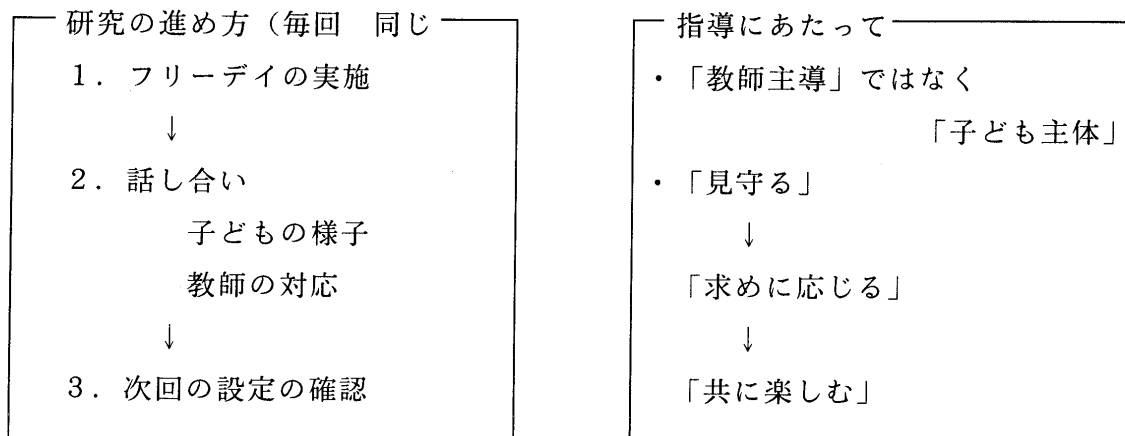
表Ⅲ－７ フリーデイが生まれるまで



表Ⅲ－８ フリーデイの日程



表Ⅲ－９ フリーデイ実施の前に話し合われたこと



『フリーデイ』は、子どもに意欲的かつ主体的に行動する力などをつけるとともに、教育課程を見直すための一つの視点を与えてくれる。教師の手が入らない子どもの姿から、一人一人の育っているところ、逆に課題となる点が見えてくる。育っているところはさらに伸ばすために、課題となる点は指導していくために、どんな指導内容になるのかを検討し、それを計画的に組んでいく必要がある。フリーデイで、今ある生徒のありのままの姿を出させ、その姿から教育課程再編を考えていくことは、まさしく子どもから出発する視点に立ったものといえる。

『フリーデイ』の実践を通して、次のことが確認された。（表Ⅲ－10）

#### ◎教師にとって

- ・通常の授業では、目標・課題がいつも意識の中にあり、子どもたちとの接し方もゆとりあるものとはいえないことがある。その点、フリーデイでは子どもたちの気持ちの動きなどにも以前より注目するようになってきた。
- ・子ども一人一人を時間をかけて見つめることができ、しかも、教師全体で一人一人の子どもについて、深く話し合うことが出来た。このことにより、一人一人についての「育てたいこと」が見えてきて、個別の指導計画にも生かしていくことができる。

#### ◎子どもにとって

- ・自分を出す（自己表現）ことによって、相手から自分が理解される。フリーデイの回数を重ねるごとに、子ども同士お互いを理解し合えるようになってきた。このことは、人とのつきあい方を学ぶ根底となっている。
- ・どこに行っても何をしてもよいという設定から、自分で考えて場所を移り、好きなことを見つけて行う自由さがある。自己判断、自己選択、自己決定の力が養われることにつながった。
- ・「今日のフリーデイでは、〇〇をしよう」と考えたり、使うものを準備したりして、登校してくる子どももでてきた。意欲をもち、主体的な生活姿勢を見せるようになった。

#### ◎教育課程再編に向けて

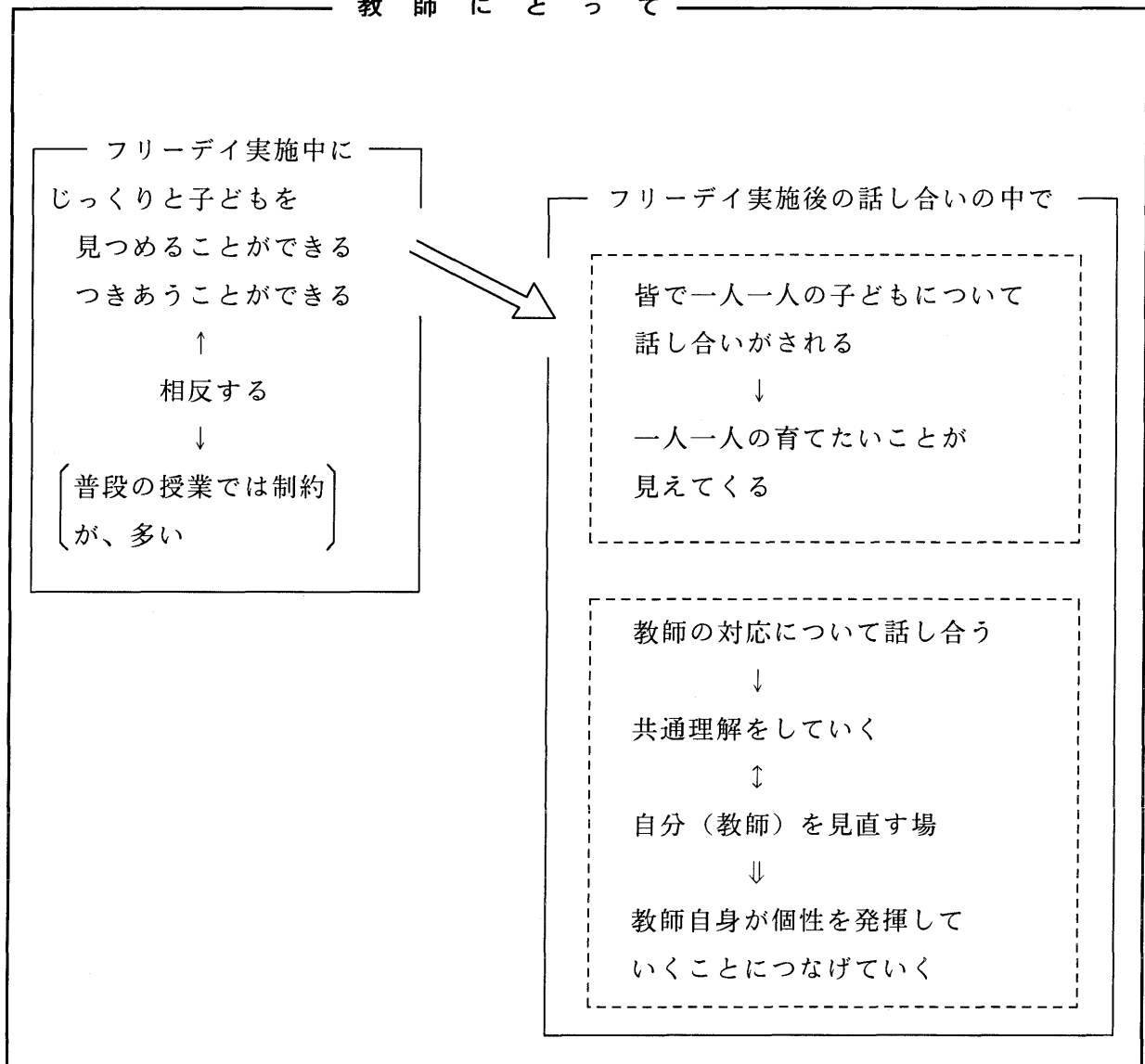
- ・フリーデイで見た子どもたちのありのままの姿から、今後、育てていくこと、教えていくことに何があるのかを探っていきたい。
- ・子どもたちを見つめるなかで、アイデア・ヒントをつかみ、指導内容や時間割、日課表、行事の見直しに再検討を加えたい。
- ・『フリーデイ』は、子どもたちにとって興味・関心に基づいて主体的・創造的に取り組み、自分で課題を見つけ解決していく学習となっている。新学習指導要領の「総合的な学習の時間」にあたると考えられ、教育課程再編にあたり、新たに組み入れていかなければならないと考えている。



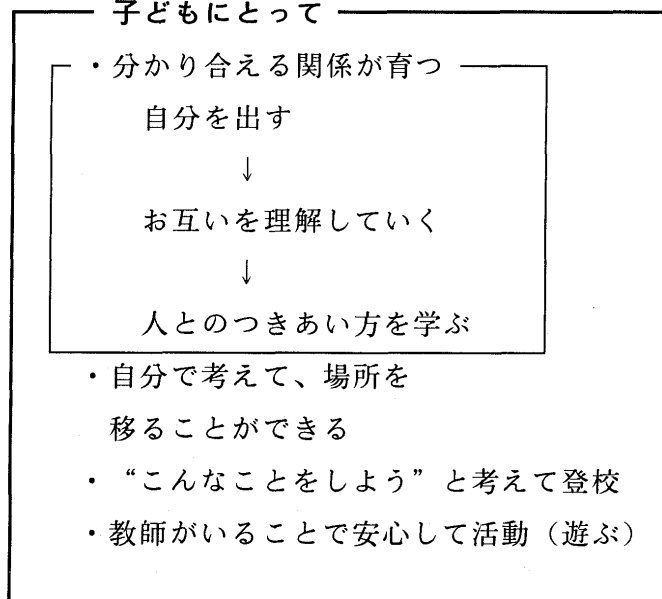
「らくがき、楽しいな」

表Ⅲ-10 フリーデイに取り組んで

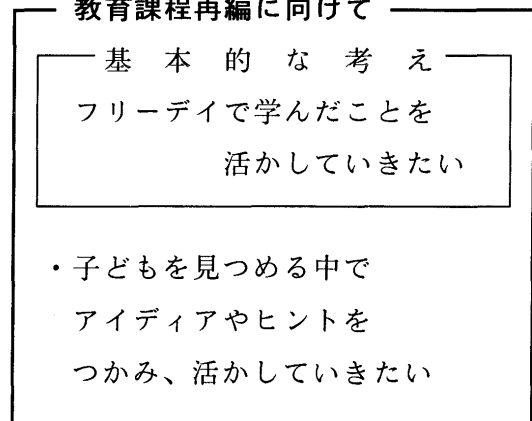
教師にとって



子どもにとって



教育課程再編に向けて





### （３）現行の教育課程の一部見直し

今年度は、現行の教育課程に記載されている「中学部の目標」と「編成にあたって重視した点」についての見直しを手がけた。現行の教育課程に記載されているものは、以下の通りである。

#### 中学部の 目標

- ・健康・安全についての関心を高め、身体機能及び体力の向上につとめる。
- ・日常生活や学習活動の充実を図り、生活経験に広がりをもたせる。
- ・集団のきまりや役割を理解させ、自主性、協調性を養う。

#### 編成にあたって 重視した点 (中学部)

- ・基礎的な学力や、生活能力を養う内容を取り入れる。
- ・健康で生き生きとした生活が送れるような体力づくりの活動を取り入れる。
- ・友だちとのかかわりを豊かにするような内容を取り入れる。
- ・子どもの実態に即し、生活経験を広げる内容を取り入れる。

生徒の実態やこれまでの研究からあきらかにしてきたことなどを念頭に置いて、見直しに向けて検討を重ねた。

#### ①研究の過程

はじめに、中学部では「どんなことに重点を置けばよいか」という話し合いから、以下のことが出された。

—— いろいろな体験をする中で ——

- ◎人とかかわる力
- ◎表現する力（自己表現、自己表出、自己決定）
- ◎基礎基本となる学力
- ◎健康な心と体づくり

#### ②指導の重点

上記の４つを受けて、さらに指導の重点として、以下の６つにまとめた。

—— 指導の重点 ——

- ア．基礎的知識や生活技能を高める。
- イ．たくましい心と体を育てる。
- ウ．生活経験を広げる。
- エ．まわりに働きかける力を育てる。
- オ．みんなと一緒に生活する力を育てる。
- カ．自分で考え、表現する力を育てる。

指導の重点1つ1つについて、確認されたことは、次の通りである。

ア. 基礎的知識や生活技能を高める。

社会の中で自分を活かす力となる内容から、普段の生活の中で活用して生活を広げ豊かにしていく内容まで、幅は広い。言葉や数量の学習から、身辺処理、健康・安全、公共物の利用、マナーや挨拶、身近な道具・器具の扱い、余暇に関する事など、多岐にわたる。指導にあたっては、一人一人にあわせて行われることが望ましい。また、課題に直面したときに、解決してやろうという気持ちを持ち、解決していく力も育てていきたい。

イ. たくましい心と体を育てる

自分から体を動かし運動をすることを楽しみ、また、心も開放させ、心身ともに健康であるように、継続して運動を行う。特に、持久力をつけていくようにする。全校集会のリトミック、体育、養護・訓練などの時間に行うほかにも、学校生活のさまざまな場面をとらえて取り組んでいく。また、多少、困難なことにぶつかってもそれをのりこえるための支えとなるたくましい心と体を育てていく。

ウ. 生活経験を広げる

学校の中での活動はもちろん、校外に出て様々な経験を広げる。目的をもって行動し最後までやり遂げる、課題にぶつかったときに解決のために努力する、友だちと同じ経験を共有することで仲間意識をもつ、楽しい経験を積むことで生活に意欲をもつことなどにつなげていく。

エ. まわりに働きかける力を育てる

自分の意思を相手に伝えたり、相手からの働きかけを受け入れたりする力を指す。気持ちを伝えあうことに喜びを感じ、自分から他者に働きかけようとする。養護・訓練の時間のほかに、学校に来るお客さんとの出会い、歓迎会など、場を設定してコミュニケーションする力を豊かにする取り組みを行う。

オ. みんなと一緒に生活する力を育てる。

人とのつながりの中で生きていくための力を指す。集団での活動を通して、きまりや規律、自分の役割がわかり、協調しつつ自主的に行動できること、目的に向かって一緒に活動し、満足感や成就感を得ることなどにつなげていく。ねらいや内容にあわせて、学級、学部、学校全体、縦割りなど、グループの大きさ、質を工夫して取り組む。

カ. 自分で考え、表現する力を育てる。

自分の力と個性を発揮して、生活していくための力を指す。いろいろなものに興味・関心を持ち、心も体も動かして対象に働きかけ、自己表現する。自分の望む生き方をするために、目的意識をもって積極的に生きていくことをねらう。設定したものでは、ハッピータイム（音楽、発表）や美術、運動会の団体演技、表現会の劇があげられる。フリーデイは、まさに自分で考え、判断し、行動（自己表現）しなければならない場といえる。

\* 6つの指導の重点は、教育課程再編を進めていく上で、柱となるものであり、中学部の新しい目標にもつながっていくものと考えている。まだ未完成であり、今後さらに検討していく必要がある。

### ③ 6つの指導の重点と教育内容との関連

その後、6つの指導の重点について、言葉が曖昧で何を指すのかわかりにくいという指摘があり、若干の修正を加えた。修正後に出された6つの指導の重点と週時表に表記されている内容との関連を以下の表で示す。それぞれの教育内容には、複数の指導の重点が含まれるが、特に重要と考えられるものに、○印をつけて示した。

		基礎的 知識と技能	たくましい 心と体	生活経験	コミュニケーション する力	みんなと一緒に 生活する力	自分で考え 表現する力
フ リ ー デ イ			○	○	○	○	○
ハ ッ ピ ー タ イ ム	ゲ ー ム		○	○	○	○	
	音 楽	○				○	○
	発 表			○	○	○	○
	週 番					○	○
生 活		○	○	○	○	○	○
グ ル ー プ 学 習		○					
美 術		○					○
職 ・ 家		○		○		○	
体 育		○	○			○	
養 護 ・ 訓 練			○		○		
行 事			○	○	○	○	○

\*なお、現行の週時表は、以下の通りである。

#### 中学部時間割

曜 限	月	火	水	木	金	土
	学 級 朝 礼					
1	全 校 集 会	生 活	中・高朝の会	全 校 集 会	中学部集会 (ハッピータイム)	生 活
2	グ ル ー プ 学 習	生 活	グ ル ー プ 学 習	グ ル ー プ 学 習	職 家	生 活
3	グ ル ー プ 学 習	生 活	美 術	グ ル ー プ 学 習	職 家	生 活
4	養 訓	生 活	美 術	養 訓	職 家	生 活
	給 食					
	清 掃					
5	中学部集会 (ハッピータイム)	中学部集会 (音 楽)	ク ラ ブ	中学部集会 (ハッピータイム)	体 育	
6	生 活	生 活		生 活	体 育	

備考 ・グループ学習は国語、数学などを能力別で指導するもの  
・職家、美術はグループに分かれる

(北 川 伸 二)

## 2 実践例

### 〔H・Tの実践 1〕

活 動 名	ゲーム（ゴロ卓球）	週時表の表記	H・T（体育的活動）
学習の形態	学部	生徒数 17名	教師数 4名
<p><b>活動のねらい</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卓球の球やラケットの扱いに慣れ楽しくゲームができる。</li> <li>・友だちと力を合わせてゲームをすることの喜びを味わう。</li> </ul> <p><b>生徒の実態</b></p> <p>・ゲームに積極的に取り組む生徒やルールが難しく参加の仕方にむらがある生徒など様々である。これまで「けんぱ」「ボウリング」「風船バレーボール」などを行ってきたが、一人一人は楽しんでいるが友だちと一緒に力を合わせるという場面が少なかった。このゴロ卓球については、卓球クラブに所属している生徒が一人おり、うまく打ち返せる生徒も何人かいて興味をもっている生徒が多い。しかし、球を目で追うことが難しかったり、力まかせに打つだけの生徒もいて、ラリーはあまり続かない。</p> <p><b>活動内容</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①「ハッピーチルドレン」の曲を流し、体育館に椅子を持ってきて集合する</li> <li>②黒板に「HAPPY・TIME」のタイトル、内容（メニュー）、実施回数を書く。</li> <li>③ゴロ卓球の仕方について知る。</li> <li>④ペアを決め、ゲームをする。</li> <li>⑤上手だったことや頑張ったことを話し合う。</li> </ol> <p><b>配慮事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・球が台の横にそれてゲームが続かなくなるので、細長い段ボールを卓球台のサイドに当てて球が落ちないようにする。</li> <li>・球がうまく転がらずに宙に浮いてしまうと打ち返すのが難しいので、ネットを折り曲げネットの下をくぐらせるようにして転がすことを意識づけるようにする。</li> <li>・卓球の球だけでなく、アルミホイルで作った球やビニールの球などいろいろなもので練習する。</li> <li>・ペアが上手な者同士、ルールが分からない者同士にならないよう配慮する。</li> <li>・ペア同士で守備範囲を決めたり作戦を考えたりできるようアドバイスする。</li> <li>・得点板係、球拾い係などの役割を与えると共に、友だちのゲームをよく見させる。</li> <li>・最後には「ゴロ卓球大会」をして勝敗表やメダルを用意し気持ちを高めさせる。</li> </ul> <p><b>今後の課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・見ている時間を短くし、より自発的にゴロ卓球ができるようにするための工夫。</li> <li>・生徒全員が参加して楽しめるとともに、達成感が味わえるようなゲームの考案。</li> </ul>			

## 活動の様子

ゲームは、体育的な活動を通して心身の開放感やときには緊張感を味わい、一つの目標に向かって友達と協力し合うことをねらって取り組まれている。そのことを通して、活動そのものの楽しさや達成感や自信など、得られるものは大きい。実際のゲームにおける活動は次のように行われている。

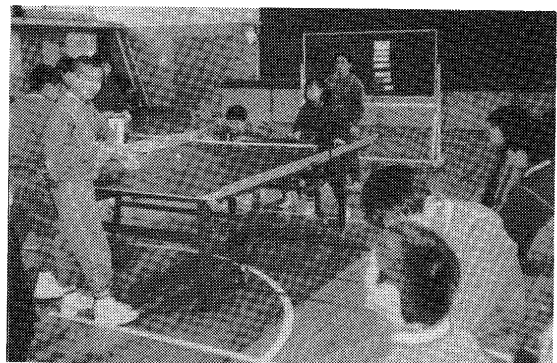
毎週月曜日、5限が始まる1時30分までには、体育館に子どもたちが運んできた椅子がすっきり並べられ、「ハッピーチルドレン」の曲をかける子、黒板に「HAPPY・TIME」とタイトルを書く子、ギターを抱えてリズムを取っている子、そのそばで音楽に合わせて踊っている子など、自分の役割を意識して活動している様子が見られる。

2学期に行われた「ゴロ卓球」ではダブルスで行うため、まずペアを決めることから始めた。最初は教師がそれぞれのペアを決めていたが、徐々に「だれといっしょにする？」と子どもたちに聞くようにした。こうしたことで子どもたちの気持ちを尊重したり、選択への意思決定をさせたりしようと考えたわけである。しかし、基本的にはある程度の運動技能をもち活動意欲がある子と、ルールの理解は難しいが自分なりに取り組める子をペアにしてゲームを行なっているので、望み通りにはいかない場合もある。勝敗にこだわる子ほど、強い子と組みたいと言ってくるが、だんだん「〇〇さんがだめなら、△△さんでもいいや」と受け入れられるようになってきた。そして、学年を越えたペア、男女のペア、体格が大きく違うペアなど様々なペアができ、ゲームが開始される。

卓球クラブに入っているR男は普段友だちとじゃれ合ってばかりいてあまり自分から進んで物事に取り組むタイプではないが、このときばかりはさすがに自分から「やりたい！」と挙手したり真剣な表情で積極的に強い球を打ち返すなど、その様子には目を見張るものがあった。B男は小柄で技能的にも他の子に比べ優っているとはいえないが、ゴロ卓球では難しい技術をそれほど要しないので自信をもって参加し、おぼつかないラケットさばきながらそれを意欲でカバーして頑張っていた。E子は運動の場面になるとうつむいたまま黙り込んでしまうことがあったが、たまたま一緒にペアを組んだT子がバドミントンなど運動の得意な子で二人の呼吸を合わせ接戦の末見事に勝つことができたことで、それ以来大変積極的な姿勢が見られるようになった。その他、球が通り過ぎていくのを見ているだけだった子が返ってきた球を集中して追視し打ち返そうとしたり、初めは力まかせに打っただけだった子がゆっくり落ち着いて打つようになったりペアの子に打つのを譲ってあげたりという姿も多く見られるようになった。ゲームをすることで自分をコントロールしたり相手のことに心を配ったりすることができるようになったのである。

初めの頃は、レクリエーション的なものとして自己開放をし、意欲や自発性を養える場として考えていたが、しかしそれだけでなく、互いに関わり合い子どもたち同士で共にこころを育て合うことにも大きな意味をもつ活動であったと改めて思った次第である。

(河 合 利 秋)



しっかり打つぞ!!

活 動 名	音楽	週時表の表記	H・T（文化的活動）
学習の形態	学部	生徒数	17名 教師数 4名
<p><b>活動のねらい</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌を歌ったり、踊ったり、いろいろな楽器にふれることで自分を表現する。</li> <li>・みんなと一緒に活動する中で、かかわる力を育てる。</li> </ul> <p><b>生徒の実態</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌やダンスを好み、楽しみながら参加できる生徒が多いが、中には集中できなかったり、賑やかな場所が苦手な生徒もいる。しかし授業とは別に休み時間、カセットテープやCDを聴いたり、ピアノを弾きながら歌う生徒の姿も見られ、自分の好きなスタイルで音楽を楽しんでいる。</li> </ul> <p><b>活動内容</b></p> <p>①「ハッピー・チルドレン」の曲が流れると、椅子を持ってホールに集まり、曲に合わせて踊る。</p> <p>②本時の流れを教師が説明し、知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>a. 歌を歌う……季節にあった歌や、生徒からのリクエスト曲。</li> <li>b. リズム打ちや音階……コンガやサウンドブロックの楽器を使う。</li> <li>c. ダンスを踊る……ステップなどを紹介し、曲に合わせて、自分流に踊る。</li> </ul> <p><b>配慮事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎時間のパターンを決めておくことで、授業に見通しがもてるようにする。</li> <li>・教師がギターを弾いたり、一緒に踊ることで授業を盛り上げる。</li> <li>・どの活動も、最初に教師や得意な生徒が見本を見せ、他の生徒に意欲をもたせる。</li> <li>・ダンスの中で紹介するステップは、生徒たちの踊りの中から取り入れ、分かりやすい動きをインプットしやすいように掛け声でアクセントを付ける。</li> <li>・授業にのってこない生徒には無理強いせず、自主的に参加するのを待ち、見守る。</li> </ul> <p><b>これまでの活動</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌……たんぽぽ・キャンプだホイ・夏の思い出・友だちはいいもんだ            ・大きな古時計・翼をください・ジングルベル etc.</li> <li>・ダンス……だんご3兄弟・ダンス天国・地球をドンドン・100%勇氣            ・0点チャンピオン etc.</li> </ul> <p><b>その他</b></p> <p>歌やダンスは、合宿などの学校行事やお客さんを迎えた時など、場を盛り上げるときには欠かせないものになっており、ホールを真っ暗にし、ミラーボールやお立ち台を設置してディスコでも盛り上っている。そして、今年の表現会では歌やダンスがメインとなり、怒り・けんかのシーンも身体で表現した。</p>			

## 活動の様子

いつものように中学部ホールから「ハッピー・チルドレン」の楽しい音楽が聞こえてくると、子どもたちは急いで自分の椅子を持ちホールへと急ぐ。そして所定の位置に椅子を並べると、すぐさま音楽に合わせて自由に身体を動かし始める。その楽しそうな何人かの輪の中に1年生のE子の姿が見られるようになっていた。

E子は様々な活動に意欲的に取り組み、クラスの中でもよく発言し、明るい生徒であるが、時に自分を出し切れず、黙り込んでしまうこともあった。ハッピータイムのように集団が大きくなり、部集団となると、さらにその傾向が顕著に表れていたように思える。教師がみんなに問い掛けたことに対しては答を返すことはあっても、個人的に質問されると黙りこんでしまう。コンガでのリズム打ちにしても、3年生 2年生ときて「次は1年生

誰かやってみたい人！」の問い掛けには「ドキ！！」「えー！！」と声を出し、やってみたいという反応を示しているが、他の人に「やってみたらー」と押しつけるような態度を取ってしまい、教師の「E子やってみるか」の声には下を向いてしまう。このようなことが何回か続き、E子はやりたいのにできない気持ちからか涙を流したことがあった。

『B男もD子もあんなに楽しそうに叩いている。私もやりたい・・・』そんな思いもあったかもしれない。そこで「今度の時間 挑戦してみようか」と小声で声を掛けてみた。すると「うん」と返事が返ってきた。いつもこのような状態になると教師の言葉にも耳をかそうとしないE子だけに、素直に自分を出せない、くやしい気持ちが伝わってきた。

一週間が経ち、いつもとは変わらない様子のE子であったが、今日こそはと密かに期待はあった。いつものようにリズム打ちの順番が1年生にまわってくると、E子はあと一息が踏み出せない様子でこっちを見ていた。「E子やってみる？」とみんなには気付かれないように声を掛けると、E子は黙って恥ずかしそうに立ち上がり、みんなの前で少し控え目ではあったが、ついにコンガを叩くことができた。そして自分の席に戻って来たE子は、満足気なとてもいい顔をしていた。少し背中を押すかたちにはなってしまったが、E子にとっては大きな一歩を踏み出せたのではないかと感じた。



その頃からか「ハッピー・チルドレン」の曲

「さぁ、おどろう！」

に合わせ、椅子から立上がり、身体を揺らすE子の姿が見られるようになった。E子は日頃から憧れを抱いている3年生のT子やN子が楽しそうに踊っている姿を以前から目で追っていたり「T子ちゃん上手」と自分もあんなふうに踊ってみたい、みんなに注目してもらいたい、という気持ちがありながら、それをうまく表現できずにいた。しかし、今までの自分から一歩でも踏み出せたことや、上級生や友だちとかかわることによって、それが少しずつ自己開放につながり、自分で踊ることによって表現できるようになったと考えることができる。まだ素直に自分を表現しきれない場面の多いE子だが、いろいろななかかわりの中で育ってほしい。

(土 山 美千代)

活動名	お客さん	週時表の表記 H・T（文化的活動）	
学習の形態	学部	生徒数 17名	教師数 4名
<p><b>活動のねらい</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな人との出会いを通して新しい文化や世界に触れて視野や体験を広げる。</li> <li>・人とのつながりを深め、コミュニケーション能力を高めるとともに人と通じ合う心地良さを知る。</li> </ul> <p><b>生徒の実態</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・着席行動が難しい生徒、それが我慢できない生徒、騒がしいのが苦手な生徒など、会話を中心とした活動は難しい集団である。</li> <li>・人に対して興味・関心をもっていながらどうアプローチしていいのかわからなかったり、自分一人の世界に閉じこもりがちな生徒もいる。</li> </ul> <p><b>活動内容</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①「ハッピー・チルドレン」の曲に合わせて踊り集合する。</li> <li>②プログラムを見て活動内容を知り、プレゼントを渡す人を決める。</li> <li>③お客さんを呼び、お客さん当てクイズをする。</li> <li>④お客さんと自己紹介しあったり、質問したり、握手をする。</li> <li>⑤お客さんに特技を見せてもらったり、それにチャレンジしたりする。</li> <li>⑥お礼に歌を歌ったり、プレゼントを渡したりしてお別れする。</li> </ol> <p><b>配慮事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒に身近でいながら普段深くかかわりが無い人物をお客さんに呼ぶことで生徒の関心を高めたり、授業後も継続してつながりを深めていけるようにする。 さらに外国の人も紹介して日本とはちがう文化に触れることができるようにする。</li> <li>・お客さんは最初、顔を隠してもらい「誰なんだろう」という期待感を持たせる。事前にビデオが撮れるお客さんの場合はビデオクイズで紹介し、楽しい雰囲気を盛り上げる。</li> <li>・授業の流れは毎回ほぼ同じパターンにして生徒に見通しをもたせる。またプログラムを紙に書いておき、授業中に書き込んだり、授業後写真や絵などもプラスしてそれを見ながら話題にできるようにする。</li> <li>・本来は一時限の授業であるが、お客さんの特技の内容などにより、時間を長くとりたりしてお客さんと子どもたちが触れ合う時間を多くとるようにする</li> </ul>			



#### 準備教材

- ・プログラム、マジック、お客さんへのプレゼント、お客さんが特技を見せるときに必要な用具など。

#### その他

- ・授業後、書き込みや写真を貼ったプログラムを廊下に掲示して中学部の活動を保護者や他学部の人に紹介する。

### 活動の様子

その日はいつもと違い、中学部のホールではなく生活訓練棟の「すずかけの家」でH・T「お客さん」の授業を行った。今回のお客さんはR男のお母さんで「すずかけの家」2階のお茶室でお茶を入れてもらうためだった。お茶室には毛氈を敷き、釜に湯を入れ、本格的な雰囲気になるよう準備した。

本校には茶道クラブがあり、中学部の生徒も何人かは習っているものの、ほとんどの生徒はお茶など初体験である。もちろん、茶道クラブに入っている子でも、きちんと作法を覚えているわけではない。まして普段の授業中の様子からきちんと座っていただけるのかどうかさえ不安であった。したがって今回は作法云々は最低限にして「R男のお母さんとお茶の雰囲気を味わう」ことを目標とした。R男のお母さんも同じように考えていることを打ち合わせの時に確認した。

「お客さーん！」といつものようにみんなで呼ぶと、布をすっぽりかぶって顔を隠したR男のお母さんが登場した。「誰かな？」と顔をのぞきこむようにじっと見る子どもたち。次に顔を隠したまま布をとってもらう。和服姿をみてますます「？」という感じであるが、玄関に停めてあった車から「R男のお母さんかな？」という子や、そばにあるやかんや和服の胸元にあった懐紙入れから「お茶？」と気付く茶道クラブの子もいた。そこで「R男のお母さん！」と呼んで顔を見せてもらおうと、R男は目を大きくしてちょっとびっくりした様子だった。まさか自分のお母さんが来るとは思ってなかっただろうし、お母さんの和服姿を見るのも珍しかったのだろう。お母さんに自己紹介してもらい、子どもたち一人一人が前に出て握手をした。



緊張しながらお点前拝見

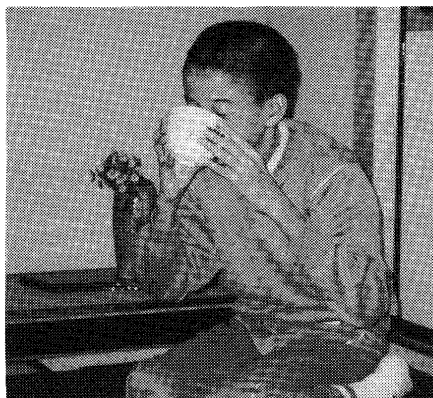
いよいよお茶会の場面になった。全員一度にすることはできないので学年ごとに挑戦することにした。「おばちゃんと一緒に辞儀してね。」「すぐにお菓子を食べないで、どうぞといったら食べてね。」とR男のお母さん。赤い毛氈の上にきちんと正座する3年生の子どもたち。隣の部屋で2年生、1年生が見守る中、神妙な顔でお菓子をいただいてからゆっくりお茶を飲み、お辞儀も上手

で、さすが3年生というところを見せることができた。次は2年生。ゆっくり味わうということができなかったり、お茶が飲めない、お菓子はいらぬなどあったが、お手前が終わるまで緊張感をもって座っていた。

そしていよいよ1年生。1年生は今までの「お客さん」の授業でもよく立ち歩き、集中することが難しい子どもが多い。今まで隣の部屋で待っていたのでなおさら待ちきれないのでは？という心配があった。案の定、目の前におかれたお菓子をぱっと手にとるO子。

しかし、横に座った担任のこぼれを聞き入れ、お菓子を元に戻した。一方Z男は鼻先を何度もお菓子に近づけ、じーっとお菓子を見つめ、

本当に「食べたい！」という気持ちが伝わってくる。だが、このお茶室での礼儀を子どもたちなりに十分感じ取っており、決して手には取らなかった。1年生の子どもたちは3年生、2年生のしている様子をちゃんと見ていた、だからこんな風にできたのだと思った。R男のお母さんから次のような感想をもらった。



「お先にいただきます」

『下手くそなお手前を一生懸命見てくれた中学部のお友だちにこちらこそありがとうございます。みんな静かに座って・・・それなりに雰囲気味わってくれたかなと思います。』

みんなが一通り済んでから、お茶を点ててみたいという子にはその機会を設けたり、お茶を運ぶ役割を茶道クラブの子どもたちにしてもらった。茶道クラブの子どもたちは今回やる気満々で積極的に参加していた。自信をもって参加している姿がうれしかった。また、初めてお茶に触れた子どもたちの中にもきめ細かくお茶を点てることができたり、お茶が大好きでおかわりした子など私たちに新しい一面を見せてくれた。本物に触れるとき子どもたちのこころは素直に反応している。難しいと思われることでも体験することが必要であるとあらためて思った。

今回のお茶会の授業は思ったよりもたくさんの準備や協力を必要とした。R男のお母さんはもちろん、学部外の先生にも準備や当日のお手伝いをしてもらった。また、授業後に、茶道クラブの先生から授業について声をかけてもらったり、プログラムの掲示を見た他のお母さん方からも、「〇〇なら教えられるから呼んでね。」と反響があった。これからもH・Tの「お客さん」を続けていくことで子どもたちの世界を広げていきたい。そして中学部の子どものことをもっと知ってもらい、たくさんのつながりができればいいと考えている。

(竹 内 君 江)

活 動 名	来週の行事と週番目標	週時表の表記	H・T（週番活動）
学習の形態	学部	生徒数 17名	教師数 3名

活動のねらい

- ・来週の行事等の予定を知る。
- ・来週の週番目標を話し合う。

生徒の実態

- ・行事に関心のある生徒が多く 予定の話はよく聞いているが、着席行動が難しく、途中で立ち歩いたりする生徒もいる。
- ・週番活動を自主的にできる生徒は少ないが、教師の支援を得てだいたいの活動を経験し、役割を果たすことができる。

活動内容

①「ハッピー・チルドレン」の曲を聴いて、椅子を持ってホールに集まる。  
曲に合わせ自由に踊る。

②週番の号令で挨拶をする。

③来週の行事等の予定の話を聞く。






④来週の週番目標を話し合い、多数決で一つ目標を決める。

⑤月末にはその月の誕生日の生徒に「ハッピーバースデー」の歌を歌って祝う。

⑥特別なお知らせがある時は、その都度話をする。

⑦今週の週番の号令で終了し、椅子を教室に片づける。

[板書例]

12 (月)	13 (火)	14 (水)	15 (木)	16 (金)	17 (土)	18 (日)
体重測定 	注射 	インフルエンザ 	やきいも 	おかいの日 		お休み

配慮事項

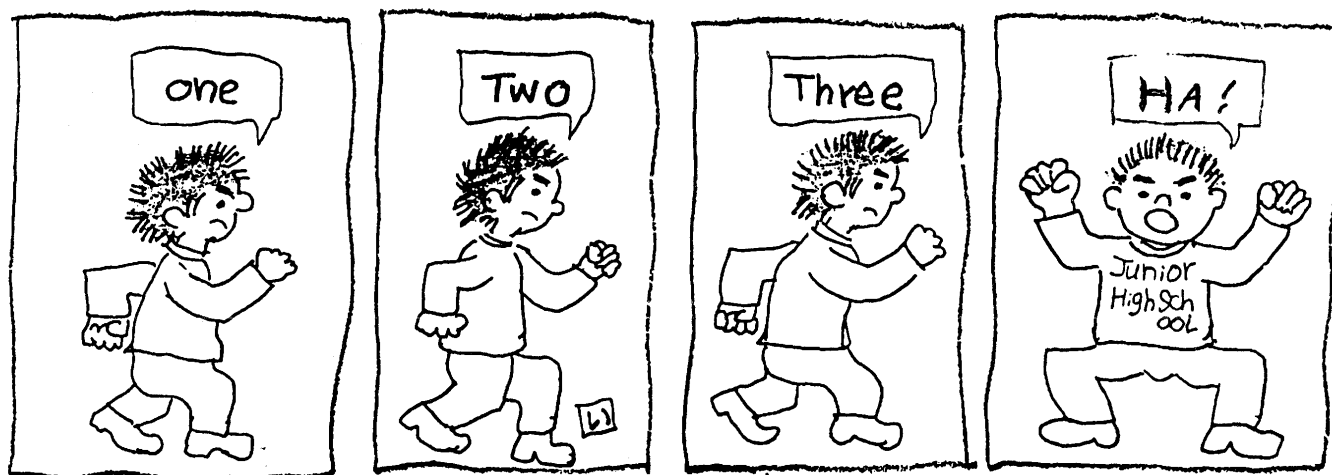
- ・行事や予定は黒板に板書する。その際カレンダーを意識させ、月日や曜日を明記する。行事は文字だけでなく絵などでも表すようにして、どの子にもわかりやすいようにする。
- ・週番目標を考えることのできる生徒は少なくなっており、意見がなかなか出てこないときには、行事と関連付けてヒントを与えるようにする。
- ・いくつかの意見からひとついいと思うものを選ぶことができない生徒には挙手するように支援する。

（近 藤 明 子）

活 動 名		表現会活動		週時表の表記		H・T（行事）											
学習の形態		学部		生徒数		17名		教師数		8名							
<p>活動のねらい</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・表現会のための劇づくりをすることにより、表現活動を楽しむと共に、皆と作り上げる喜びや、完成したときの成就感を味わう</li></ul> <p>生徒の実態</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・2年間表現会の劇づくりを経験している3年生と、初めてである1年生では、劇づくりの見通しの持ち方に違いがある。</li><li>・個々においては、表現することに意欲を持ち積極的に参加する子、表現する意欲はあるものの自分を開放しきれない子、他人の活動に興味がなく自分勝手な行動に出る子、全く集団の活動を嫌う子など様々である。</li></ul> <p>活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①ハッピーチルドレンの曲を流す。その曲を合図に生徒は自分で椅子を持ち集まる。</li><li>②全員が揃うまで曲に合わせて踊る。これにより、次の活動の前にリラックスすることができる。</li><li>③またその間、生徒が自発的に黒板に「HAPPY・TIME」、その日の「メニュー」、実施回数の通しNo.を書く。</li><li>④全員が揃ったら、その日の活動内容を知る。</li></ul> <p>※練習開始から本番までは以下のような流れで行なう。</p> <p>劇の完成まで（32校時）</p> <table><tr><td>気持ちづくり</td><td><ul style="list-style-type: none"><li>・中学部教師8名がそれぞれの演技をする。</li><li>・生徒が一人ずつ舞台の上で自由に演じる。</li></ul></td></tr><tr><td>イメージづくり</td><td><ul style="list-style-type: none"><li>・生徒が一人ずつ舞台の下で課題の動きを演じる（緊張させないため）</li><li>・ダンス映画のシーンをビデオで見る。</li><li>・劇の内容を知るために教師が創った紙芝居を見て、配役を選択する。</li></ul></td></tr><tr><td>練習</td><td><ul style="list-style-type: none"><li>・教師の見本を見て、集団でダンスのステップを踏む。</li><li>・声を出すことに慣れるために、ゆっくり・大きく声を出す。 （名前を言う・返事をする・好きなことを言う 等）</li><li>・場面に応じた動きと台詞を練習する。その前に必ず教師の見本を見てイメージをつかむ。</li></ul></td></tr></table> <p>↓</p> <p>本番</p>												気持ちづくり	<ul style="list-style-type: none"><li>・中学部教師8名がそれぞれの演技をする。</li><li>・生徒が一人ずつ舞台の上で自由に演じる。</li></ul>	イメージづくり	<ul style="list-style-type: none"><li>・生徒が一人ずつ舞台の下で課題の動きを演じる（緊張させないため）</li><li>・ダンス映画のシーンをビデオで見る。</li><li>・劇の内容を知るために教師が創った紙芝居を見て、配役を選択する。</li></ul>	練習	<ul style="list-style-type: none"><li>・教師の見本を見て、集団でダンスのステップを踏む。</li><li>・声を出すことに慣れるために、ゆっくり・大きく声を出す。 （名前を言う・返事をする・好きなことを言う 等）</li><li>・場面に応じた動きと台詞を練習する。その前に必ず教師の見本を見てイメージをつかむ。</li></ul>
気持ちづくり	<ul style="list-style-type: none"><li>・中学部教師8名がそれぞれの演技をする。</li><li>・生徒が一人ずつ舞台の上で自由に演じる。</li></ul>																
イメージづくり	<ul style="list-style-type: none"><li>・生徒が一人ずつ舞台の下で課題の動きを演じる（緊張させないため）</li><li>・ダンス映画のシーンをビデオで見る。</li><li>・劇の内容を知るために教師が創った紙芝居を見て、配役を選択する。</li></ul>																
練習	<ul style="list-style-type: none"><li>・教師の見本を見て、集団でダンスのステップを踏む。</li><li>・声を出すことに慣れるために、ゆっくり・大きく声を出す。 （名前を言う・返事をする・好きなことを言う 等）</li><li>・場面に応じた動きと台詞を練習する。その前に必ず教師の見本を見てイメージをつかむ。</li></ul>																

### 配慮事項

- ・練習を始める前には毎回黒板にその時間の練習内容を書き、言葉と動作で知らせ全員が見通しをもてるようにする。
- ・活動の導入には教師が見本を示し、動きに見通しをもたせる。その際、注目させたい部分を誇張して、生徒が演じ易いようにまた興味をもてるようにする。
- ・子どもたちが演じた場合にはまず良いところを誉め意欲をもたせ、次の段階としてもっと良くなる演じ方を指導する。
- ・演じ方を指導するときには子どもたちの興味の持続に注意し、少しでも嫌な素振りが見られたときや気持ちが乗ってこないときには無理強いしないで、次回にする。
- ・指導する側の心得として、練習中は子どもたちの“自分も演じてみたい”という気持ちづくりを大切にし、その手だてとして指導者は常に演じることを楽しみ子どもたちが興味を持つように時には大胆に、時には繊細に演じる。
- ・指導中は気持ちを前向きにもち、17名の子どもたちを全員指導者に集中させるつもりで行う。
- ・指導する内容については一度に多くを望まずポイントを絞り伝えるようにする。
- ・精神的な自立がまだできていない子には、集団の中で“みんなと一緒に”演じることによって表現する喜びを味あわせるようにする。



“怒りの表現” 劇中に採用

## 学習の様子

毎年、劇の練習は私たち教師の“演じる”見本（あえて手本ではなく見本である）から始まる。教師一人一人が舞台の上で文字通り体を張って演技をするのである。いつも子どもたちの前に立って話しをしている私たち教師でも、舞台の上で一人で演じるということは勇気がいる。身を持って“自己開放”の見本を見せるために教師たちは必死である。何をするかを準備してきている者 その場で即興的に考える者 当日はどの教師の表情も真剣で一生懸命さが出ており、見ていて感動した。下の写真のようにどの子も舞台上の演技に釘付けになった。



やるなあ、先生たち

そして当日、誰もが早く演じたような表情をしている中、真っ先に舞台に上がりたいと手を挙げたのは、中Ⅲのリーダー的存在であるY男であった。彼はその日のために、お気に入りのテープを持参し、ディスコ風ダンスを演じたのである。踊り自体は走り回ったり飛び跳ねたりする単純なものであったが、顔は汗びっしょりでとても真剣な表情であった。

このY男は、学校生活において何事に対してもやる気があるのだが自己中心的なところがあり、友達や教師との間で行き違いがよくあった。去年の劇づくりでは、劇に集中していない様子で演出の教師の言うことをあまり聞き入れず、自分勝手なことをしていたという経緯がある。

しかし今年は違った。その担任の演技によって意欲が全面に出て、演出の教師が求めた以上の演技を練習で見せ、それを見ていた同級生や下級生にもよい影響を与えたのである。もちろん、このことは劇を指導していた私たち教師にも好影響を及ぼしたということはいうまでもない。さらに本番まで集中がとぎれることなく、間際になり出番が増えてもそれに動揺することはなかった。劇が終わって緞帳が降りたとたん「やった」と小躍りしていたY男の姿がとても印象的だった。

教師たちのパフォーマンスの中で3年生たちの心を動かしたのは、その担任が演じた音楽付きのダンスであった。その単純でユーモラスな動きが、子どもたちの心の中に“スーッ”と入っていったのであろう。その演技を見てどの子も早く舞台に上がって演じたいという意欲が伝わってきた。しかし時間切れで生徒たちの出し物は翌日になった。



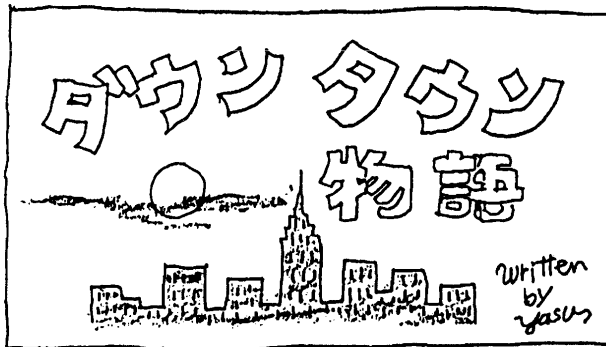
自己表現する先生

（今 井 康 弘）

# 1999年 中学部 創作劇

## 『ダウンタウン物語』 (紙芝居の抜粋)

この劇は自作である。子どもたちの  
やる気を大切にしたいから....。



ここは、New York  
マンハッタンの Down Town。  
ここで、若者たち どうして  
毎日、争いが 繰りひろげ  
られていた。

ここを支配するのは  
RED団と BLACK団の  
二大勢力である。

『ダンス天国』と  
『だんご3兄弟』  
ダンス合戦をい  
ている。



ある日、RED団の1人が「火事  
に、巻きこまれる事件が起き  
る。

「助ける」「助けない」で口  
論になる。でも結局は皆の  
力を合せて助ける。

友だちの大切さを知った  
若者たち。

その後は 皆の力を合せ  
て、平和な日々が 続き  
ました。



こうして、今年も表現会が終った。それぞれの子どもたちは、  
新しい事に戸惑い、悩んだ。けれど、また、ひとまわり大きくなった。

活 動 名	お楽しみ調理	週時表の表記 生活	
学習の形態	学級（中Ⅰ）	生徒数 6名	教師数 2名
<p><b>活動のねらい</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ みんなで一緒に調理をする中で、教師や友達とかかわりを持ち、みんなで生活する力を育てる。</li> <li>・ いろいろな調理器具を使い、調理することで生活経験を広げる。</li> </ul> <p><b>生徒の実態</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 調理経験の少ない生徒がほとんどであるが、この「お楽しみ調理」の時間を好む生徒は多く、積極的に取り組んでいる。しかし、料理によって興味が左右される生徒も中には見られる。</li> <li>・ 食べることが好きな生徒ばかりであるが、偏食傾向の生徒も多く見られる。</li> </ul> <p><b>活動内容</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① エプロンとずきんを身に付け、席に座る。</li> <li>② 作る料理とその材料を知る。</li> <li>③ 作り方の手順の説明を聞き、見通しをもつ。</li> <li>④ 調理をする。</li> <li>⑤ できあがった料理をみんなで食べながら、友達の感想を聞く。</li> <li>⑥ 後片付けをする。</li> </ol> <p><b>配慮事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 苦手な野菜をおいしく食べることができるよう工夫する。</li> <li>・ 料理名や材料をクイズ形式にし、生徒に興味を持たせる。</li> <li>・ まず教師が調理器具の使い方を示し、さらに安全に注意させる。</li> <li>・ 黒板に作り方を細かく分けて書き、今何をしているか確認できるようにする。</li> <li>・ 全員に役割を持たせ『自分たちみんなで作る』という意識をもたせる。</li> <li>・ 『自分たちで作った』という達成感を味わわせる。</li> </ul> <p><b>その他</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生活では毎時間「お楽しみ散歩・調理・園芸」の中から生徒一人一人が自分のやりたい活動を選び、教師はその意見を尊重しながら活動を決定していく形をとっている。</li> </ul>			



## 活動の様子

1学期は、みんなの好きなスパゲッティを題材に調理を3回行った。調理の材料になるのは「お楽しみ園芸」の時間に自分たちの手で植えた野菜などが中心となった。

第1弾は、まだ何も野菜が育っていなかった為、素・スパゲッティを作り、第2弾はハーブのバジルを使ってバジリコ・スパゲッティを作った。そして季節も7月半ばになり、ベランダで栽培している野菜も育ってきたところで、スパゲッティ第3弾。3回目ともなると「今度は何スパゲッティ？」と生徒たちの中からも声が上がるようになった。今回はなすスパゲッティに挑戦。なすはクラスの半数以上が苦手という野菜であり「なす」と聞いてただけでも怒りだすK男。しかし、今回はミートソースも混ぜることを告げると、これにはK男も他のみんなも大喜び。ちなみにK男はスパゲッティといえばミートソース・スパゲッティのことだと思い込んでいたようで、それは第1弾の素・スパゲッティの買物の時、「麺しか買わないよ」と言ったにもかかわらず、手際良くミートソースの缶詰と粉チーズをかごに入れてきたことから、ミートソースが好きなことは分かっていたのだった。そしていつもの様に手順を説明していく中でも教師が「麺を・・？」と聞いてみると「ゆでる！」など答えが返ってくるようになり、おおまかな見通しをもって取り組める生徒も出てきた。早速、いつものように麺をゆで、その間になすを包丁で切り、あく抜きをする。最初は「包丁怖い できない」といていたY男も、友達が自由に切るのを見ているうちに「やりたい」と積極的になり、自分なりに切ることができた。あく抜きをしたなすをフライパンで炒める作業は、T子が「やりたい」ととても積極的であった。そして、いよいよなすとミートソースを混ぜようと缶詰のふたを開けたとき、S男が初めて自分から寄ってきて、フライパンの中を覗き込んだ。S男は1回目・2回目共に調理には興味を示さず、『早く作ってよ』といわんばかりの態度であった。ミートソースを入れようと横で待ち構えていたT子であったが、S男の珍しい行動に「入れる？」と缶詰と菜箸を差し出した。S男は箸をとり、入れ始めた。S男も好きな食べ物だと分かると興味が湧いてきたのか、それからはずっとみんなと一緒に横で見ている。そして、ついになすスパゲッティができあがりお皿に分けると、Y男はなすを指差し「自分で切った」と何度もいい、T子は「フライパンで・・」と炒める手振りをして見せた。自分で作ったという達成感があったのだろう。なすが苦手



「おいしくできたかな？」

な生徒たちのお皿もすぐに空っぽになり「おかわり」の声も上がっていた。

今までは、家の人料理を作っている姿を見ることがしかなかった生徒たちが、これまでの3回の調理の中で、実際「ゆでる」や「炒める」を体験することができた。さらに、自分たちが植えた野菜を使って料理を作り、調理器具を使って調理ができたことを、自分たちの生活に少

しでも活かしてもらいたい。そして、みんなと一緒に活動する中で、教師や友だちとかかわる力も身に付けてほしい。

(土 山 美千代)

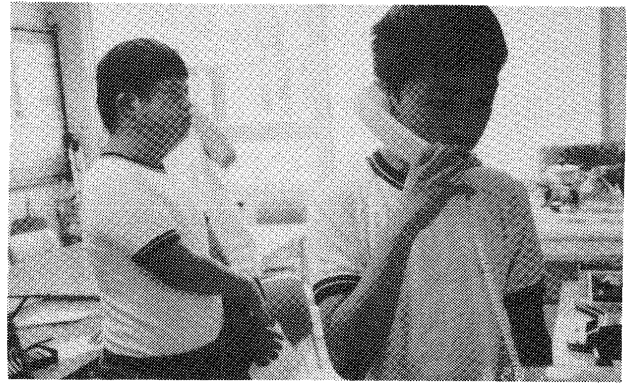
活 動 名	週時表の表記	生活
友だちの家訪問	生徒数 5 名	教師数 2 名
学習の形態	学級（中Ⅲ）	
<p><b>活動のねらい</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちの家を訪問することで、友だちの知らなかった一面を知り、お互いについての理解を深める。</li> <li>・訪問の際のマナーやエチケットを守る態度を育てるとともに、公共の乗物を利用したり、いろいろな職業があることに気づくなど社会的経験や社会認識を広げる。</li> <li>・見通しをもってお互いに協力したり、主体的に活動したりする態度を養う。</li> </ul> <p><b>生徒の実態</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちのことを意識し、心配したり、いっしょに遊んだり、いろいろ教えてあげたり、友だち同士のかかわりは多く見られる。</li> <li>・友だち関係が深まることで、もっと友だちのことを知りたいという気持ちや自分のことをもっとわかってほしいという気持ちがみられるようになり、友だちの家に行ってみたいと希望する生徒も出てきている。</li> </ul> <p><b>活動内容</b> (配時)</p> <p>①〔訪問の計画と準備〕 ・計画を立てる。 4 時</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問先の家に電話をする。</li> <li>・訪問の目的を話し合う。</li> <li>・おみやげを買いに行く。</li> </ul> <p>②〔友だちの家訪問〕 4 時</p> <p>③〔まとめ〕 ・様子や感想を話し合い、思い出の本を作る。 2 時</p> <p><b>配慮事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・計画を立てる際は友だちの通学方法を知り、どうやって行けばいいか考えさせる。また友だちの家の職業を知り、いろいろな職業があることに気づかせる。</li> <li>・訪問先の家に電話をかけて家の人をお願いしたり質問したりして、電話をかける経験をさせる。</li> <li>・持っていくおみやげを自分たちで買いに行き、好きなものを選ばせる。</li> <li>・訪問の際は挨拶をきちんとしたり、マナーを守って遊んだりするように声を掛け、みんなが楽しくすごせるように配慮する。</li> <li>・わからないことや困ったことがおきたときには、適切なアドバイスをする。</li> </ul>		

## 活動の様子

友だちの家訪問の活動は昨年度からの継続した取り組みであり、R男の家は5人の中の最後の訪問先となってR男も心待ちにしていたものである。

R男は七塚町から毎日片道1時間程かけて自家用車とバスを乗り継いで一人で通学している。家族は父母・祖父母・姉・妹2人・弟の9人家族。家は建築関係の仕事をしており、自宅の他に大工小屋2棟がある。R男は弟のM男が大好きで学校でもよく「M男 M男」と名前を口にしてしているが、家のことなどを聞かれても適切に答えることはできない。しかし今回の訪問についてはとても楽しみにしているようで「ぼくのうち」と言ってうれしそうな顔を見せていた。

事前にR男の家へ行く計画を立てることになった。「どうやって行くの?」「何を見せようの?」「何して遊ぶの?」とみんなで考え、わからないことはR男に聞いてみるがR男からは「M男やよ」という返事が返ってくるだけ。そこでお母さんに電話してわからないことを聞いてみようということになった。電話をかけるという経験は5人ともほとんどなく、「ぜひ電話できるようになってほしい」という親の願いを懇談会でよく耳にしていたこともあり、この機会に試みてみることにしたのである。どんなことを聞きたいか、それぞれ考えてメモをしてから電話をしてみた。住所録を見ながら慎重に一つずつ数字を探してプッシュホンを押したのはY男。無事つながってすぐにR男のお母さんが出てくれた。R男に受話器を持たせたが今までかけたことのないR男は受話器から聞こえるお母さんの声にびっくりしたのか、すぐに受話器を



「もしもし 行ってもいいですか?」

担任につき返してしまった。そこですぐになかよしのJ男に代わった。J男は会話がおうむ返しになることがほとんどであり、電話をかけた経験はなく、質問も担任がメモしたものを読むだけである。「もしもし行ってもいいですか?」と言うとR男のお母さんの返事も聞かずに受話器を返してしまった。そこでT子にタッチ。はっきり聞き取れないことが多いT子の言葉であるが、「おみやげ持っていくね。なかよくしようね」とゆっくりはっ



「おみやげ 買ったよ」

きりと話していた。続いてY男。「弟いますか?」「おみやげ持っていきましょうか?」

「食べ物いいですか?」とたくさん質問したけれど、お母さんがどんなふう to 答えてくださっているのか、そばで見ている担任には聞こえない。後で「なんて言ってた?」と聞いたけどY男は「まあね」と言うだけだった。

最後に質問したN子。「弟いますか?」「M男です」「動物いますか?」「金魚とツバメ

の巣があります』『遊び道具はありますか?』『R男の好きなファミコンがあります』『大工さんの仕事場を見せてもらえますか?』『ぜひ見てください』『ブランコで遊べますか?』『二つあるから遊べます』とやりとりしたことを後で教えてくれた。あらかじめメモしてあったこともあって全員がスムーズに話ができたが、一方通行の会話でどんな返事が返ってきたのかを答えることができたのはN子だけだった。でも電話で話をしている時の子どもたちの表情はとても生き生きしており、今後も機会があればどんどん経験させていきたいと思った。



「ブランコ 楽しい!」

声も聞かれるようになった。と思ったら、もうそこは七塚町。「R男、おうちどこ?」と聞くと、「ここやよ」とうれしそうにR男が指した。そこには木材がたくさん置いてある大工小屋、そしてすてきな茶色の板張りの家があった。玄関で出迎えて下さったお母さんと担任が話しているあいだに、R男はさっさと我が家に入ってファミコンの前に座り、それにみんなも続いてしまった。約束のあいさつなど忘れてしまっている。そこでもう一度きちんと座りなおして代表のY男が「こんにちは。お願いします。」とあいさつした。この日のためにいろいろと準備して下さっていたお母さんは手づくりのケーキとコーヒーでもてなして下さった。これにはちゃんと「いただきます」とあいさつしてから食べることができていた。

今回の訪問の目的は「金魚」「つばめの巣」「大工小屋」「ブランコ」である。みんなで見歩いた。ブランコはテラスに取り付けてあり、2つあって向かい合わせに乗ることができ、みんなかわりばんこに乗って友だちを押してあげていた。大工小屋は2棟もあり、たくさんの木材や大きな機械が置いてあった。「これ何?」「これは?」とみんな興味津々で見ていた。直径が大人の身長ぐらいもある大きな円形の電動のこぎりの刃にはちょっとびっくりしていた。

しばらくしてフリータイムにすることにした。それぞれが好きな遊びを見つけて楽しんでた。ふと見るとY男がいない。びっくりして家のなかを探してみると R男のおじい

そして迎えたR男家訪問。土曜日の1~4限という限られた時間での訪問なので学校のワゴン車に乗って出かけることにした。おしゃれをして登校してきた生徒たち。ワゴン車に乗り込み、部主事先生や級外の先生に見送られて、学校を出発した。しばらくは緊張気味で担任の話し声にY男は「シッ!」と注意してくる。K先生の運転が慣れたところに、みんなもおしゃべりが少しずつ始まり、笑い



「おばあちゃん こんにちは」

ちゃんとおばあちゃんの部屋に上がり込んできちんと正座してお茶をいただいている。それを見たT子も「こんにちは」と部屋に入って一緒にお茶をいただいた。自然にそんなことが出来たのは友だちの家訪問の経験が生きているのかとうれしく思った。

仕事の合間に家にもどってきて下さったお父さんもいっしょに、全員で記念撮影をするともう「さようなら」の時間になってしまった。「ありがとうございました」「さようなら」とあいさつしてみんなが車に乗り込むと、R男も一緒に乗って学校に帰りたいそうだった。お母さんが「R男、一緒に行く？」と聞くと真顔で「ハイ」と答え、泣きそうな顔になっていたとのことだった。



「お家の人もいっしょに パチリ」

帰り道はだんだん雨が大きくなって、途中から前も見えないくらいの土砂降りの雨になった。おまけに工事中のところもあって、運転は大変である。すると要所要所でY男が「K先生、運転だいじょうぶか〜？」と声をかけてくれる。これに、K先生もはげまされて無事学校に帰ってくることができた。

訪問後 R男のお母さんから『遠いところほんとうにありがとうございました。みんながとても自然体で学校以外でも仲が良いし、すごく素直な感じで子どもらしくてそんな様子をみていて私もホッとしました。もっと近かったらいつでも来てもらえるのに。』と感想をいただいた。

5人の友だちの家訪問を終えて、「また来てほしい」「休日にも遊びに行ったり、遊びに来たりできるようになってほしい」「ずっとこのままの仲良しの5人でいてほしい」という感想がたくさん聞かれ、うれしく思っている。今後、この経験を生かして、子どもたちの生活をもっと広げるために、さらなる支援をしていきたいと思っている。

(近 藤 明 子)

活動名	散歩（川遊び）	週時表の表記	生活
学習の形態	学級（中Ⅱ）	生徒数	6名 教師数 2名
<p><b>活動のねらい</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスの仲間と一緒に自然の中で楽しむことができる。</li> <li>・川遊びを通して自分で考えて行動したり、チャレンジするたくましい心と体を育てる。</li> </ul> <p><b>生徒の実態</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生のうちに散歩の経験を積んでいて散歩の楽しみを知っている。そのせいか教室の中の授業よりも目的を持って出かける散歩を好んでいる。</li> <li>・クラスの友だちには関心をあまり示さなかったり、自分一人である傾向が強い生徒が多い。</li> </ul> <p><b>活動内容</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①散歩に行きたい場所をそれぞれが発表し、友だちの意見を聞いた上で今日行く場所を決める。</li> <li>②その場所に行って何をするか、持ち物は何が必要か、移動手段などを話し合う。</li> <li>③みんなで一緒に行動することを確認して散歩の場所に出かける。</li> <li>④途中、必要なものを買ったり、景色を眺めたり、友達や担任と話しながら移動を楽しむ。</li> <li>⑤目的地に着いたら活動場所を決め、荷物を下ろす。</li> <li>⑥川に入る、石を投げて遊ぶ、魚を追っかける、カップラーメンを食べるなどの活動をする。</li> <li>⑦後片づけ、忘れ物がないかどうかを確認して学校に戻る。</li> </ol> <p><b>配慮事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・散歩に行く場所はなるべく子どもたちの意見を尊重する。</li> <li>・安全面に留意する。</li> <li>・持ち物、準備など子どもたちと一緒に用意するように心がけ、子どもたちにそれぞれ役割意識を持たせる。</li> <li>・でこぼこした河原が苦手な子どももいるが無理強いをせず、友だちの楽しい様子や誘いによって自分から川へ入れるようにする。</li> </ul>			

### 準備教材など

・カセットコンロ、ガスボンベ、カップラーメン、お茶、紙コップ、タオル、タモビーチサンダル、着替えなど。

### 活動の様子

「今日の散歩はどこに行きたい？」生活の時間に生徒によく聞く質問である。子どもたちは今まで散歩して覚えている場所。気に入っている場所、またはお家の人と行ったところやこちらが予想しない場所をいうことがある。「公園」、「デパート」と意見がどうしても分かれるときは「じゃあ、公園を通してデパートに行こうか。」と折衷案を出すこともある。

もちろん教師の方から提案することもあり、まだ暑い9月上旬、「川」に行くことにした。「川」といえば近くの浅野川へ何度か行ったことがあり、子どもたちにもなじみ深く、大好きな散歩の一つである。しかし、今回は思い切って車を使って移動し、きれいな上流の方へ出かけたいと考えた。いつもは教師2人に生徒6人なのだが、級外の先生も誘ったところ「行く、行く！」と乗り気である。9人でギュウギュウになったワゴン車は、にぎやかに出発した。

川の上流に着くとなるほど水は澄んでおり、水深も浅く、いい感じである。しかし、どうしたら川へ下りられるのか？少し足場が悪いようであった。それでも水遊びが好きで身軽なU君はアッという間に川へ下り、バシャバシャしていたかと思うと向こう岸まで渡ってしまった。残された者たちはカセットコンロやラーメンなど、持ってきた荷物をつきソロソロと川に近づいていった。坂になったところを四つん這いになって下りなければならず、「怖い」という気持ちが先にたつ子どもたち。日頃こういう動きはしていないので手足をどう使っているかわからないのだ。でも「早く川に入りたい！」という気持ちの方が勝っている。「手をついてゆっくりおりるんだよ。」と教えると、教師を見本として何とか川へ下り立つことができた。

さあ、それからは思い思いに水の中を歩き回り、石を投げてしぶきをあげたり、川底をのぞき込んだりして遊んだ。S男は川へ下りる時、少し草で擦り傷を負ったようだが一度担任に訴えただけですぐに水遊びに夢中になっていた。普段は細かいことを気にするS男なのだが水遊びの楽しさで気にならなかったのだろう。T男は魚がいるのを見てタモを振り回してみるのだが魚が小さすぎて網目からもれ、捕まえられない。でも、面白いのかタモを何度も川に入れて遊んでいた。

しばらくして、湯を沸かし、カップラーメンを食べることにした。ただカップラーメンを食べるにもいろいろ騒がしい。まず、透明のフィルムがはがせないG男。はがす位置を教えてやると何とか自分ではがせた。次にカップを手で持つと斜めになりスープが手にかかるM男。いつも机の上に置いて前かがみになって食べる彼は手に持ちながら食べる経験がないのだ。M男は少し冷めるのを待ち、こぼれないようにして食べていた。また、食べ

始めるのが遅いK子はラーメンを受け取ってもすぐに食べない。ラーメンを不安定な石の上に置いてしまい、中身をこぼしてしまった。平らにおけるような場所をK子に教える。

自然の中に身を置きながら活動すると生徒達はいろんな局面にあい、その度私達にも新しい発見がある。子どもたちは友だちの様子を見たり、自分で考えたり、ちょっと苦労しながら楽しみを味わい、大切なことを身につけていっているように思う。そんな少し冒険のある散歩をこれからも子どもたちとしていきたい。そんなことを強く感じた今回の川遊びだった。

(竹 内 君 江)





活 動 名	フリーデイ	週時表の表記	フリーデイ
学習の形態	学部	生徒数 17名	教師数 8名
<p><b>活動のねらい</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で考え自分で判断し周りの環境（人やもの）に働きかけ行動する力を育てる。</li> <li>・「生活の主体者」となる経験をし、その喜びを知る。</li> <li>・自己決定ができるようになるとともに、コミュニケーションの力を身につける</li> </ul> <p><b>生徒の実態</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度初めてのフリーデイを行なったときには、子どもたちは遊びだしても長続きせず、教師の顔をときどき見に来ていた。中には「次なにをする？」「まだ終わらないの？」と聞きに来ることもあった。また、いくつかの輪ができるが、そのほかはほとんど一人遊びが多かった。2回目以降は、少しずつ子どもたちの行動範囲も広がって自分で遊びを見つけたり友だち同士でのいろいろなかかわりが見られるようになった。</li> </ul> <p><b>活動内容</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①中学部ホールに全員集まる。</li> <li>②フリーデイについての話を聞く。（「長い休み時間」「何をしてもいい」「行ってもいい場所」などについて）</li> <li>③1限から4限まで（あるいは給食・昼休みまで）自由に行動する。</li> <li>④再びホールに集合しその日のフリーデイのビデオを見たり、感想などを話し合ったりする。</li> </ol> <p><b>配慮事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「教師主導」ではなく「子ども主体」の指導体制をとる。教師から「～しなさい」「～しよう」ではなく、子どもの求めに応じてかかわりを開始する。</li> <li>・生活年齢に見合った教材・教具などの環境設定をこころがける。</li> <li>・子どもとていねいにコミュニケーションをとりながらかかわるようにする。</li> <li>・教師も子どもたちと同じ立場に立ち、自分の好きなことを子どものそばで行う。</li> <li>・ビデオを撮り、子どもたちにフリーデイの様子を見せるだけでなく、教師全員で「生きる力」を育てるという視点で子どもたちの動きやかかわり方について話し合う。</li> </ul> <p><b>今後の課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの目標や課題に対して教師はどう支援していくか共通理解する。</li> <li>・フリーデイを教育課程の中にどのように位置づけるか検討する。</li> </ul>			

## 活動の様子

昨年のフリーデイを経験している3年生や2年生は、今年も自分のしたいことを満足いくまでして、とても楽しんでいる様子が見られた。3年生は絵を描くのに熱中している子、機織りをずっとしている子など一つのことにじっくりと取り組むことができ、その集中力には教師も驚くほどであった。2年生は担任を巻き込んで歌ったり踊ったり、あるいはビーズ通しをして首飾りを作ったり、また運動の好きな子はずっと一輪車に乗っていたりと、その子その子が思い思いの時間を過ごしていた。

さて、1年生は初めてのフリーデイである。いったいどのような様子を見せてくれるのか教師にとっても大変楽しみであった。まず「何をしてもいいよ」「4限までずっとだよ」と聞いて、顔を見合わせて喜んだE子とB男。K子を伴って向かったところは言語学習室。ここは絨毯が敷いてあり、いろいろな物が置いてあるので子どもにとっては魅力的な場所のようである。棚に置いてある積み木や紙芝居、楽器などを持ち出しテーブルに置く3人。そして、ひらがなが書いてある積み木で家を作り出すE子。その積み木を立てて並べるB男。ベルを鳴らすD子と初めは3人バラバラなことをしていた。ところが、いつの間にかB男のしていた積み木並べがドミノ倒しの発展していき、E子と共にせっせと積み木を長く並べているのである。ときどきD子が触って倒してしまうがきゃーきゃー言って楽しんでいる。「先生もしようよ!」と誘うので、つい一緒になってやってしまった。ドミノ倒しも飽きてきて、また棚からパズルや写真カードを見つけだして遊んだり、「何これー!」と日本歴史の紙芝居を引っ張り出してめくってみたりして、1時間ほど3人で遊んだ後、他の場所に移動した。1年生の他の3人は、どちらかというと友だちとかかわることが少なく、一人でいたり教師とのかかわりが主だったりする場合が多い。N男は図工室の隅に置いてあるスキーをしばらくじっと見つめた後、スキーを床に置いて足をのせ板を指でつついていた。しばらくたったら立ち上がりこれも図工室に置いてある電気掃除機を触ってスイッチをつけたり消したりしていた。今までこのような行動は全く見られなかっただけに不思議に思ったが、たっぷりある時間の中でN男なりにいろいろ思ったことがあったのだろう。O子は教室やホールにいたが、その後体育館に置いてあった食べ物の本を見つけ「ケーキ」と言いながら担任に指さしていた。Z男は体を動かすことが大好きだがこの日はあいにく雨で体育館もあいていない時間だったので、教室でずっとブロックを組み立ててロボットやロケットを作っていた。それに飽きてきてもいやがるような顔はせず、機織りをしたり教師用の椅子を蹴ってすーっと移動するなどして楽しんでいた。

このように1年生も初めて経験するフリーデイをすんなり受け入れてそれぞれのやり方で楽しむことができた。考えてみれば小学部の時は、朝の遊び時間、長休みの30分と自由な時間はたくさんあった。しかし中学部にきてからは着替えをするとすぐ朝礼が始まり長休みも15分と短い。誰にも邪魔されず好きなことを思う存分やれる時間は意外と少ないのである。自由な時間が十分保障され、時間を気にせずにやりたいことができるというフリーデイの試みは、自己を開放して自ら考え、判断し、決定し行動していくというまさに「生きる力」の基盤となるものを育てる取り組みと言えよう。(河合利秋)

〔職業・家庭の実践〕

活 動 名 作業学習（木工、紙工ほか）	週時表の表記	職 家
学習の形態 全学年縦割り	生徒数 11名	教師数 4名
<p><b>活動のねらい</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・皆と一緒に作業活動に参加し、活動内容への興味や関心をもつ。</li> <li>・育てることや作り上げる過程を楽しみ、収穫や完成の喜びを味わう。</li> <li>・「バザー」に向けた製品作りを通して、意欲的に活動に取り組む態度を養う。</li> </ul> <p><b>生徒の実態</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言語やコミュニケーションに問題のある生徒が多く、まだまだ人や周りのものと適切に関わり合う力が弱い。</li> <li>・活動に集中し、持続することが不得手で、指示や援助が必要である。</li> <li>・中学部全体で17名ということもありクラスの仲間だけでなく学年を越えた関わり合いも見られる。</li> </ul> <p><b>活動内容</b></p> <p>① 4つの作業の活動内容をそれぞれの担当教師から聞く。</p> <p>木工（例 マルチボード、カラー積み木、木箱）</p> <p>栽培（例 ジャガイモ、サツマイモ、紅花、苺）</p> <p>紙・布工（例 空きビンを使った花器づくり、ステンシル）</p> <p>染（例 花びら染、草木染）</p> <p>② 取り組みたい作業活動を名前カードを使って選択する。</p> <p>③ それぞれのグループに別れて作業を開始する。</p> <p><b>配慮事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提示のパターンを毎回同じにして授業に慣れ、活動に見通しを持てるようにする。</li> <li>・選択時に迷っている生徒や理解の難しい生徒にはアドバイスをを行うなどして、名前カードを貼るように促す。</li> <li>・作業グループの決定にはそれぞれの活動内容に照らして、選んだ生徒の適性や人数に偏りがいいかも配慮する。</li> <li>・安全面に留意し、効率や迅速を目指しての口出しを控え、ゆったりとした待つ姿勢を心掛ける。</li> </ul>		

## 活動の様子

中学部には作業活動を伴った学習の時間として職業・家庭（以下「職家」という）がある。

職家では中学部の生徒を縦割りに2つに分けて班を構成している。やや変則的ではあるが生徒6名と教師2名の班と、生徒11名と教師4名の班の2つである。前述の班では機織りを中心に作業活動を行っている。機織りは数年前から休み時間を利用して、世話をする教師が中心になって取り組んでいたものである。子どもたちが自主的に中学部の廊下に並んだ簡易機織り機に向かい、コースター風のものや壁飾り、マフラーなどを製作していた。友だちの織っているのを見て興味を示し、その輪がどんどん広がっていった。そこで今年度から職家の学習に組み込んで新たにスタートしたものである。後述のもう一方の班では木工、栽培、紙・布工、染の4つの作業活動を並行して行っている。従来の職家での作業内容を踏襲して一つの班にまとめた形になっている。以下、後述の班の活動について少し記してみたい。

授業はまず今日のそれぞれの作業活動の話を聞くことから始まる。いつものように4つの作業活動があることを黒板に書いて説明する。更にそれぞれの担当教師からも詳しい活動内容を聞く。なるべく生徒に分かりやすいように完成したものや使用する材料などを提示して話がなされる。その後、生徒は自分の名前カードを使って自分の興味や関心のある作業活動を選ぶ。どの作業活動を選択したかは黒板の指定された場所に名前カードを貼ることで皆にもわかる。毎回同じ作業に決めている生徒や前にしたからと今度は違う作業の中から選ぶ生徒もいる。もちろん今日の作業内容の説明を聞いて、考えて選ぶ生徒も何名かはいるが、半数ほどの生徒は成り行きやカードのマッチング学習の感覚で選んでいるようである。また友だちの名前と同じ場所にカードを貼る生徒、友だちに促されるように言われたところに貼る生徒。いい意味でも悪い意味でも子ども同士が互いに影響し合っているといえる。

最終的には教師の裁量も加味されてその日の作業グループが決定するのだが、その時々の実情に合わせて臨機応変に対応できるようにしている。例えば天候によって栽培グループの活動が中止になった時には急きょグループの数を減らしたり、バザー間近にはグループを絞って作業活動を行った。またそれぞれの作業グループの活動内容を関連付けることで作業活動に新たな広がり生まれる。栽培グループで育てた草花を使って染グループが布を染め、その布を使って更に紙・布工グループでランチョンマットを作るなどの連携を行うことができる。一人の生徒がその全ての活動に関わることも十分に可能となる。

本校で行っている職家は担当になった教師が中心となり、子どもに合わせた題材や内容を考えて活動にあたる。何かが出来るようにすることやいい物を作るということに重点を置くのではなく、仲間と一緒に作業活動に参加し、作物が育っていく、作品が出来上がっていくその過程を楽しみ、収穫や完成時の喜びを大切にしたいと考えている。知識や技能ではなく心を育て、学校生活を楽しく豊かにすると共に作る喜び、出来た喜びが働く喜びにつながってほしいと願っている。

（橋 本 直 紀）

### 3 まとめ

#### (1) 教育課程再編の視点

この10年間、私たちは子どもをどう育てるか、教育とは何だろう、学校は子どもにとってどんな場であればよいのだろう、教師の役割は何かなど、子ども観、教育観の確かめをし合ってきている。学校の教育目標が「社会適応」から「自分らしさ」を輝かせ、「全面的な発達」を一人一人に応じて追求しようという目標にきりかわったことを受けて、教育課程の再編に向けて実践が始まったと考える。この目標の転換は、かつての「愛される精薄児」「社会に間に合う子ども」という子ども観から、一人一人が自分をかけがえのない一人の人間として生きること、社会の一員としてみんなと共に生きる存在であることを、あたりまえのこととして社会全体が認め合おうという子ども観への転回を意味している。これには『人間の権利宣言』をはじめ、『子どもの権利条約』などの国際的な動向の反映もあるが、何より、子どもたちの願い、親の願い、教師の願い、子どもにかかわるみんなの願いが、障害によって、不利益、不平等があってはならない、差別されてはならないという思いや、一人の人間として生きることの重みを実感し、望んできたからにほかならない。

この願いに応える場の一つとして学校があり、この視点から学校生活、即ち、教育課程を作り上げていく必要があると考えた。

#### (2) 『心を育てる』教育課程

本校は小学部、中学部の9年間の義務教育期間と3年間の高等部としての教育期間を子どもたちに提供している。この12年間の中の青年期前半が中学部にあたるが、私たちはこの3年間で『心を育てる』時期と位置づけ、そのための内容や方略にとりくんできた。

『システムチェンジ』をなめらかに移行するものもあれば爆発するものもいる現実を受入れつつ、子ども自らがそのチェンジギアを持ち、発進し、自分をつくりあげる、そのための支援が教師である私たちの役目であるという認識にたった。つまり、あくまでギアをもつのは子どもであり、教師は『教える人』から子どもを『支える人』にシフトチェンジした。生活単元学習や集団学習の流れの上に立つ『散歩』『ハッピータイム』、そしてより一人一人の主体性、能動性を引き出し、生活を切り開く力につながることを期待して設定した『フリーデイ』にこのような基本姿勢をもって子どもと向き合った。

さらにこれらの教育活動に取り組む中から、教師は『教育』するというよりも『共育』ということばに含まれる風合いを大切にすることにした。つまり、子どもと共に、教師自らが学校生活を構成するメンバーである。子どもと共に人やもの、社会や自然と向き合い、共感的に関係を取り合うことにした。そうすることで、互いを理解しあい、今、自分はどうか、相手はどうか、どう感じとったのか、などを積み重ね、生活の充実をはかることで、子どものみならず大人にとっても心の育ちがはぐくまれていくと想定した。

『共育』をふまえた『教育』でありたいと願っている。

さらに付け加えるならば『散歩』『ハッピータイム』『フリーデイ』の実践からこれらには独特の良さがあることに気づいてきた。その中から一つだけあげるとすると、それは自由な相互交渉の場が全員に保証されているということである。自由な相互交渉はその人だけのものであり、その人らしさが十分に発揮される場でもある。対象と向き合い、そこで起きる様々な手応えを自分の中に取り込み、自己の内実を高めていく。人と人、人と物、多様なネットワークの中での関係性に注目し、この繰り返しの経験の中で「個」の育ちを見守りたい。真の自立や心の育ちにはこのような数々の営みが多様に保証されていく必要があろう。『散歩』『ハッピータイム』『フリーデイ』にはそれらに見合う時間、空間、環境が十分に保証されていると捉えている。実践例はその一例として掲載されたものである。新学習指導要領で提起された『総合的な学習の時間』との整合性についての今後の検討が課題である。

### (3) 『生活をつくる』教育課程

子どもにとって教育課程は学校生活そのものである。時間割で教科やいくつかの領域が配分されているが、子どもにとっては自分の生活そのものなのである。従って私たちは子どもたちと日々「生活づくり」をしていると言う認識に基づいて教育内容を考えていきたい。これまでの日常生活指導においても、一人一人に応じた課題にせまる支援を持ちつつ、一緒に生活する集団としての規律などに気づかせていくことが中学部の時期には特に大事なことからして加わると考える。日常生活指導の機会は自分で考え、自分で選択し、自分で行動に移す機会と改めて捉えなおしている。

『フリーデイ』を経験することを通して、これまでチャイムがなり、給食であることがわかっていても、自分から行動に移すことができなかった生徒が、自己判断、自己決定して食堂へ行くことができるようになったという変化や一緒に行こうという友達へのさそいなども多くみられるようになっている。逆にいつまでも行こうとしなかったり、手洗いをせず食べはじめるなどの問題もあるが、それらの問題場面こそが絶好の指導場面と捉え、十分なコミュニケーションを交わしながら個々の課題にせまりたいと考えている。そのためにも全教師が生徒一人一人の個別の目標を把握しておく必要があり、その観点からの個別の指導計画作成の検討が急がれる。

『フリーデイ』の試みはこれだけでなく、子どもたち自らが自分たちの生活をつくるという姿勢への変化を見せている。『フリーデイ』を経験した中Ⅲ、中Ⅱと未経験の中Ⅰでは子どもの姿勢に微妙な違いが見られる。中Ⅲの生徒の中には「明日のフリーデイにうちからカセットもってこよう」など見通しをもって、たのしみにして学校にやってくる。特定の友達とべったりくっついていていた中ⅡのR子はその友達から離れ、先生や友達に「ね、ギターしよう」などと自分から誘っている。また子どもたちの『フリーデイ』の過ごし方をみるとそこにはそれまで教科で学んだことばや遊びが混入している。『フリーデイ』から教育課程全分野を見渡すゆとりが教師に生まれ、子どもの求める「学び」を知る機会にもなる。

各教科等については 教科の内容や系統性を配慮しながら、子どもの生活課題や生活の中から題材を見だし、教材化していく試みを積み重ねていきたい。その試みとして『職家』の実践例を今回は取り上げた。小学部から高等部への中間期にいる子どもたちの教育内容は各学部と重なりあう部分を含みつつ、この時期にこそという内容を明らかにしていくことが求められる。みんなと一緒に、楽しみながら、思考のプロセスをたぐりながら、一つの具体的なものが徐々に姿を表してくる、その過程にじっくり手間暇かけていきたい。この職家だけでなく、国語や数学等においても、今、子どもたちは「学びの対象」として何を望んでいるのか、子どもたちの思いに耳を傾けながら組織したい。そしてこの分野においても『散歩』『ハッピータイム』『フリーデイ』で大事にした視点で指導にあたりたい。

学校行事などは単に慣例的な活動だからという見方で取り組むのではなく、自分たちの生活づくりの一貫として、子どもと教師が共に「今を豊かに」生きる一つのいしづえとして積極的に受とめて取り組みたいと考えてきている。表現会の実践例はその試みである。表現会の例で「今を豊かに」生きるとは、活動の中で自分を出し、表現し、知恵を出し合い、試行錯誤していく、そのやりとげていくみちすじを共に苦しんだり、楽しんだりしながら、みんなで達成感を味わうことであると捉えている。

さらにこの活動の取り組みの中で文化と呼ぶにはあつかましい（かもしれない）が、新しい表現活動や演出のスタイルも磨かれてきている。まさに「共育」の実践である。

日常生活指導、各教科、学校行事など「今の生活」を共に作り上げていくという姿勢で教育課程を改めて見直しているところである。

いずれにしろ、学校を子どもにとって楽しい場所、明日も行きたいなと思える場所にすることを基本に 中学部の教育目標を実現する教育課程を作り上げることを目指している。合わせて、ゆったりできる生活時間の流れ、ほっとできる生活空間、自分の居場所の確保など教育環境について実践の中から提起していくことも課題である。

#### （４）教師の姿勢（指導の方法、子どもとのかかわり方）

これまでの『散歩』や『フリーデイ』では特にこの分野について共通確認できることを明らかにしてきた（表Ⅲ－３・４ 表Ⅲ－１０）。学校教育全般においてこの姿勢で臨んでいきたいものである。

コミュニケーションをうまくとることが子どもにとっても、大人にとっても難しい実態である。H・Tの枠組みを音楽やメニューで提示する活動スタイルはこの実態を踏まえた指導である。友達や先生のすることを見安くするコの字型に椅子を並べているのも工夫の一つである。この枠組みの設定は子どもたちに安心感を与え、見通しをもって参加する点でも有効であり、自発性や自己表現もこの枠組みに守られながら育っている。一方、ぶらり散歩では H・Tのような枠組みは取り除かれ、学校から外へ出るという開放感もあって、ハトが大空に舞うが如きである。その大空に舞いながら、学級の仲間という枠組みが形を表してきている。この二つの指導スタイルのバランスをとりあっていくことで、のび

やかな、自然な子どもの自発性を引き出していきたいと考えている。

#### (5) 『親とのつながり』がみえる教育課程

親との連携を教育課程の中に明確に見える形で位置づけ、意識してとりくんでいきたい。  
『ハッピータイム・お茶』編に示したように、親が直接、活動に参加するというスタイルがある。この他、各学年の『親と語る会』などで得た親の思いなど、全部に応じることは難しいかもしれないができるかぎり、そうだと互いに納得し合えることについては積極的に教育内容に計画していきたい。

“おふろの日”は息子を持った母親の願いがきっかけとなっている。

また、雪の日の親からの連絡帳に“こんな日、雪すかしでも手伝ってくればいいんですがね”と書いてあったのを見て、そのクラスでは早速みんなでスコップを持って除雪に取り組んだ。がんばる子、スコップの持ち方がわからない子、雪に足をとられよろける子、担任にとっては子どもの実態を捉えるチャンスにもなっている。

語る会の中で親から“先生、フリーデイもいいけど、がまんデイというのはどうや”というご意見をいただいたことがあったが、“しごとデイ”として設定するのもいいのではないかと現在話し合っているところである。

このように親の願いを受けとめながら「大変ですねー」ということばだけを親に残すのではなく、自分自身も親と同じ立場に身をおくことを通して生まれるつながりを大切にしていきたい。

#### (6) おわりに

「教科」か「生活」か、「過保護」か「放任」か、「教える」ではなく「支える」だけかなど、どちらか一方というのではなく、互いに意見を出し合い、今の場合どうすることが子どもにとって必要かを考えていくことが大事であろう。そういう意味では教育課程は生き物である。これまでの実践を精選し、組織化し、子どもに合わせて将来ではなく「今」を豊かに生きること視点をあてた教育課程を作成したいものである。

かつて生活単元学習が障害児教育の中核であったころ、評価があいまいで、学力も育っていない、中途半端な学習ではないかと指摘された時代がある。提起されている『総合的な学習』についての評価基準も今問われているところであるが、『散歩』『フリーデイ』などの評価も課題となっている。評価を考えると、高等部卒業学年の懇談会で出された親の話に多くの示唆があるように思われる。「あそこ、散歩ばかりしていいのか」と思ったこともあったが、今振り返ると「それが今につながっている」「学校でしかできないことを経験させてやりたい」という話が出たという。評価基準を明確にできる分野もあるが「風合い」をことばで表現することが難しいように子どもの評価を簡単な項目で測ることは容易ではない。教師や親と子どもとが互いに「育ち」を実感しあえることが何より大切なことであろう。かといって独りよがりに陥ることなく、この親の「何やっとなんやろ」ということばに率直に耳をかたむける教師でありたい。今、何を課題としているか、



今この取り組みをしている、その結果こんな様子が見られる、これからはこんなことに取り組みたいなど、『散歩』だけでなく諸分野についてこのような会話を親と交わしあいながら実践を進めていきたいものである。学級通信にはその大事な役割がある。

教育課程再編にあたり、これまでの教育実践を整理し、どのような視点で見直すことができるかを軸に話し合いを進めてきた。その中でどのような子ども像を描くのか、そのための内容としてどの実践を大事にしていくか、指導のあり方として納得できることは何かについても当然ながら合わせて話し合っている。あいまいな部分など多くかかえているが21世紀への教育課程再編である。あせらず、ゆっくり進めていくことにしている。

(榎 蔵 千 恵 子)

#### 参考文献

- 1) 竹田契一 里見恵子他 「インリアルアプローチ」 日本文化科学社
- 2) 河合隼雄 「こころの子育て～誕生から思春期までの48章～」 朝日新聞社